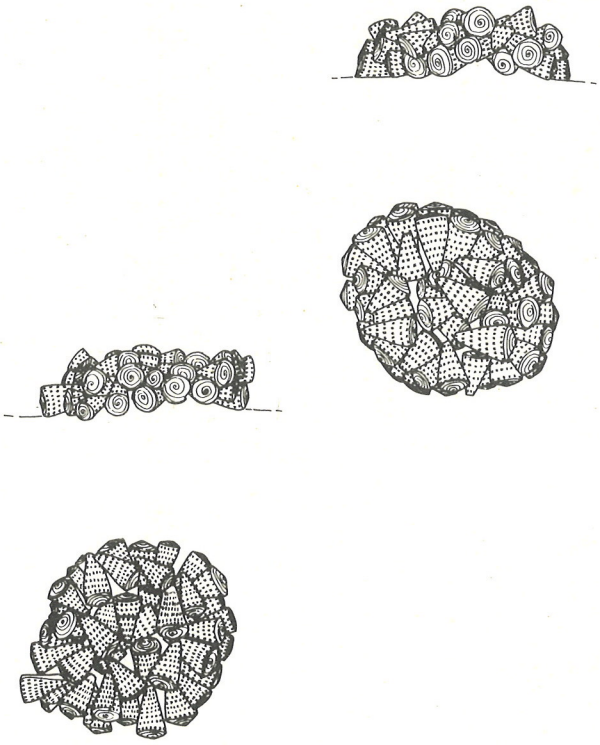
沖縄県文化財調査報告書第61集

275

伊江島 具志原貝塚の概要



1985年2月

沖縄県教育委員会

目　　次

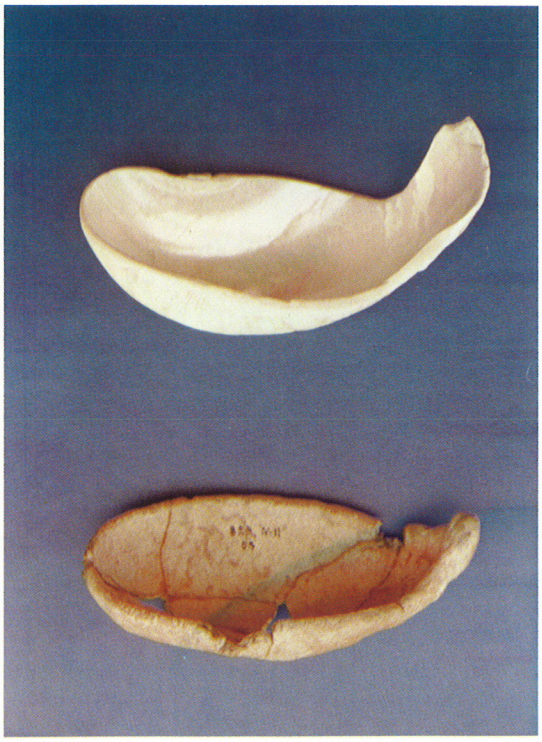
はしがき……1
調査の経過……7
層　　序……8
遺　　構……13
遺　　物……20
　土　　器……20
　弥生土器……29
　石　　器……33
　骨製品……34
　貝製品……35
　石製品……40
　土製品……40
　ガラス小玉……42
　自然遺物……42
まとめ……43

具志原貝塚西区（東より望む）

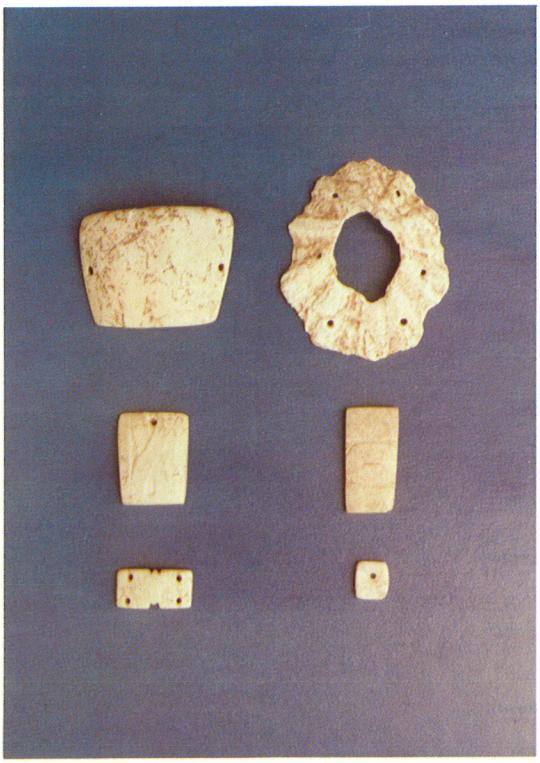
西区Ｆ26グリッドの層序

アンボンクロザメ貝の集積

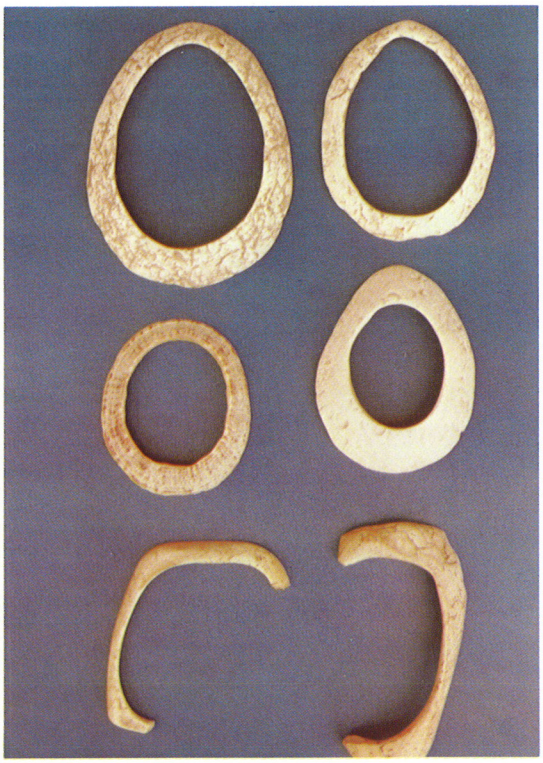
免田式土器



貝匙・土製匙



貝札等



貝　輪

はしがき

沖縄本島北部、本部半島の西およそ10㎞の洋上に低く長く横たわり、中央に突き出た岩山をもつ島が伊江島である。はるか遠くから望見しても強い印象を受けるその島影は、島伝い航路の原始時代にあっては確かな指針となったことであろう。

伊江島は原始時代の遺跡が多いことで知られる。沖縄の数少ない先土器（旧石器）時代遺跡5ヶ所のうち2ヶ所はこの島にあり、縄文時代後期から弥生時代相当期にかけての貝塚が10余箇所も分布している。伊江島の遺跡遺物をとおして沖縄原始時代の基本的な様相を把握することができるのである。

島の遺跡のほとんどは南海岸に位置する。これは北海岸が急崖で海は深く、生活に適しないのに対し、南側は低平な陸地と長大な砂丘そして遠浅の珊瑚礁が発達し、きわめて好適な生活環境を有していることによる。

具志原貝塚も島の南海岸、伊江港に面した砂丘に形成されている。1963年の発掘で沖縄で初めての移入弥生土器（山ノ口式）が発見され、九州との交渉を明らかにした記念すべき貝塚である。今回の調査においても新たに免田式土器が検出され、いっそう重要な意義をもつ遺跡であることが判明した。

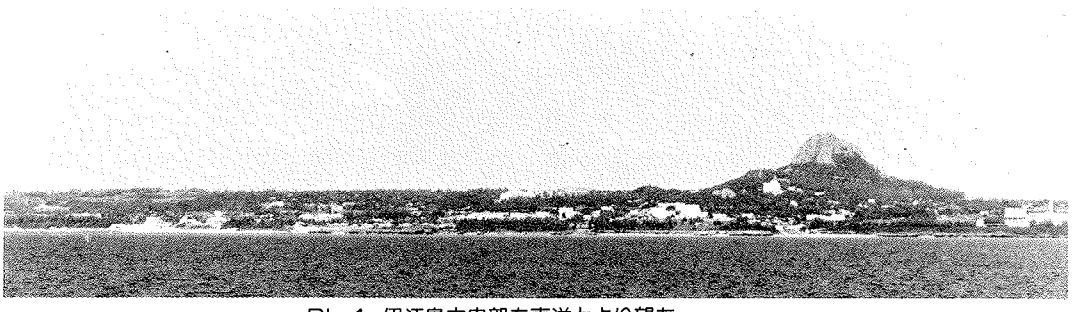
今回の調査は採砂計画に伴う緊急発掘であったが、重要な遺構・遺物の出土が相次ぎ、その適切な保存策を検討するために一時中断することとなった。本文に紹介するように、具志原貝塚はその文化層、遺跡の構成（立地や遺構など）、遺物の全般にわたって豊かな内容をもち、原始沖縄を展望するうえでも代表的な遺跡であるといえる。その概略は次の点に要約される。

第一に珊瑚礁のラグーン（礁湖）を生業の場とする海岸砂丘地への居住という、沖縄の貝塚時代後期のあり方をよく示している。

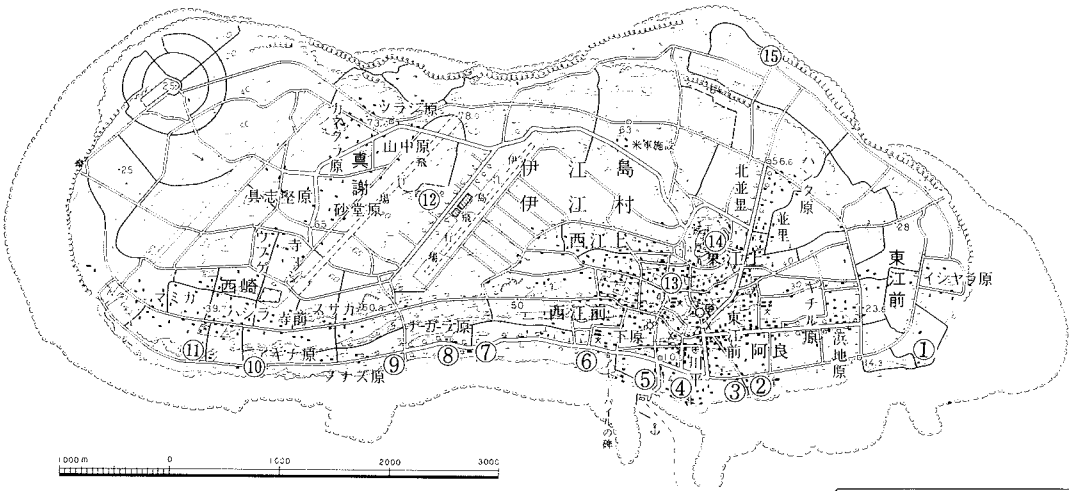
第二にこれまで縄文後期から始まるとされていた伊江島の貝塚時代を、室川下層式、条痕文土器などの出土によって縄文前期にまで押し上げると共に、後期・晩期さらに弥生時代相当期と続く明快な文化層の重なりが見られる。

第三に弥生時代相当期（沖縄貝塚時代後期前半）の層に、北からもたらされた九州弥生時代の免田式土器が伴ない、かつ九州へ移出されたとされるゴホウラ貝腕輪の類例や素材も豊富に出土していることから、彼我の交渉史がいっそう明らかになってきた。

第四に原始社会の生活の様相を具体的にイメージさせる多様な種類と形態の用具・装身具などが見られるほか、隣接して埋葬人骨の集中が確認され、集落と墓域の空間的関係が把握された。　（安里嗣淳）



PL.1　伊江島中央部を南洋上より望む



① 浜崎貝塚

② 阿良貝塚

③ 阿良第２遺跡

④ 具志原第２貝塚

⑤ 具志原貝塚

⑥ アッチ浜貝塚

⑦ ナガラ原東貝塚

⑧ ナガラ原西貝塚

⑨ フナズ遺跡

⑩ 西崎遺跡

⑪ ハシラ遺跡

⑫ ゴヘズ洞穴遺跡

⑬ 西江上遺跡

⑭ 伊江グスク

⑮ カダ原洞穴遺跡

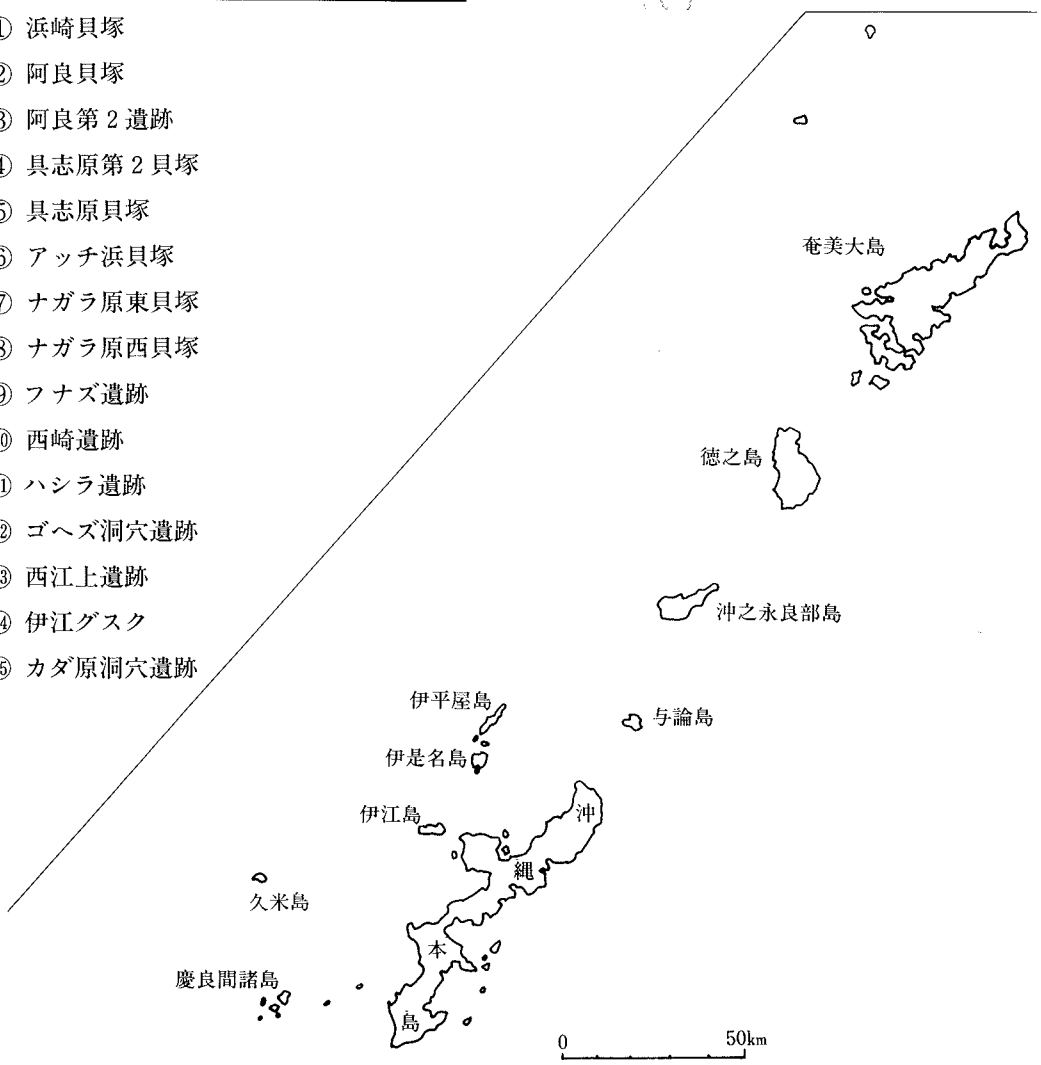


Fig.1　伊江島の位置と遺跡分布

Fig.2　具志原貝塚付近の地形

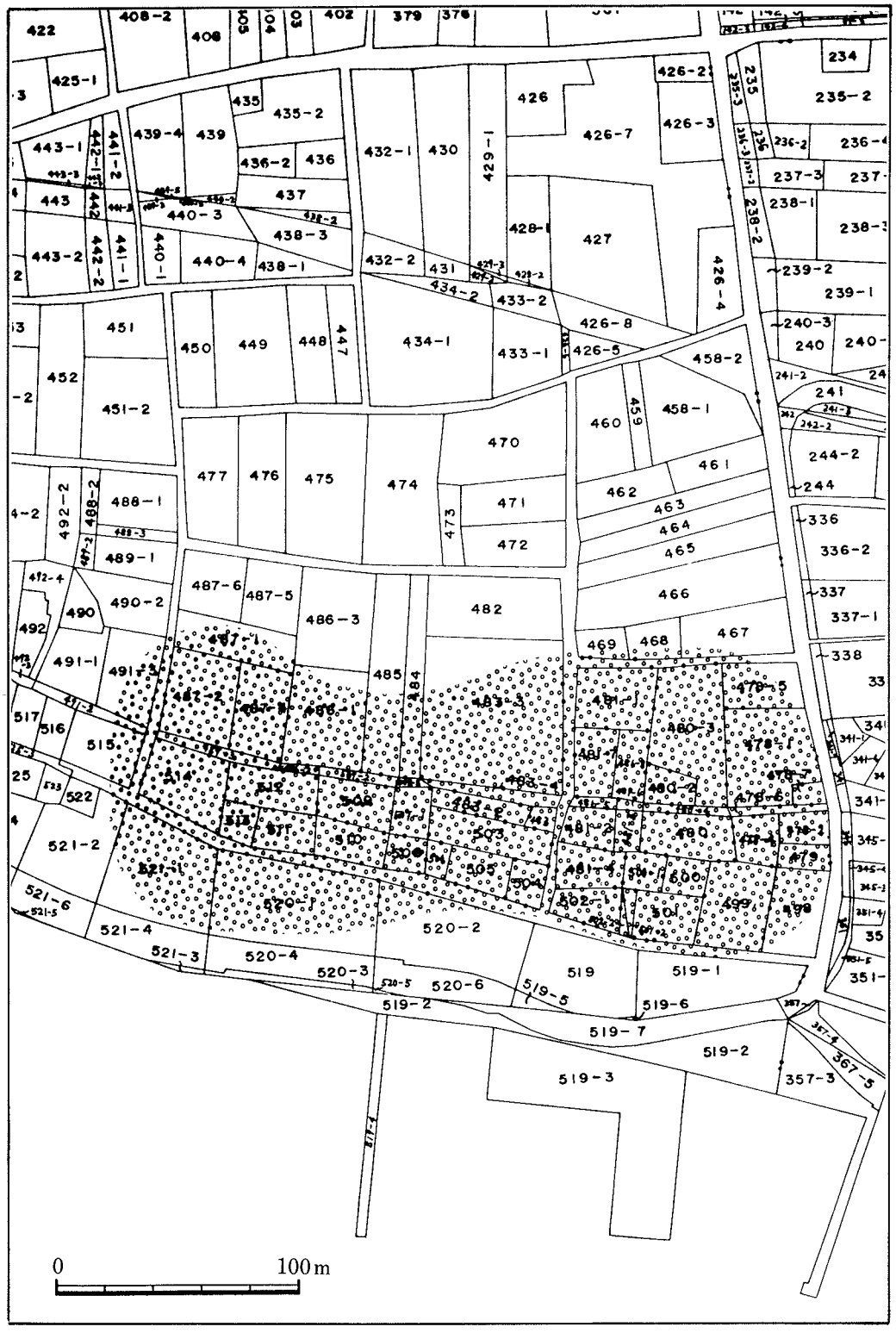


Fig. 3 貝志原貝塚の推定範囲と一帯の地籍

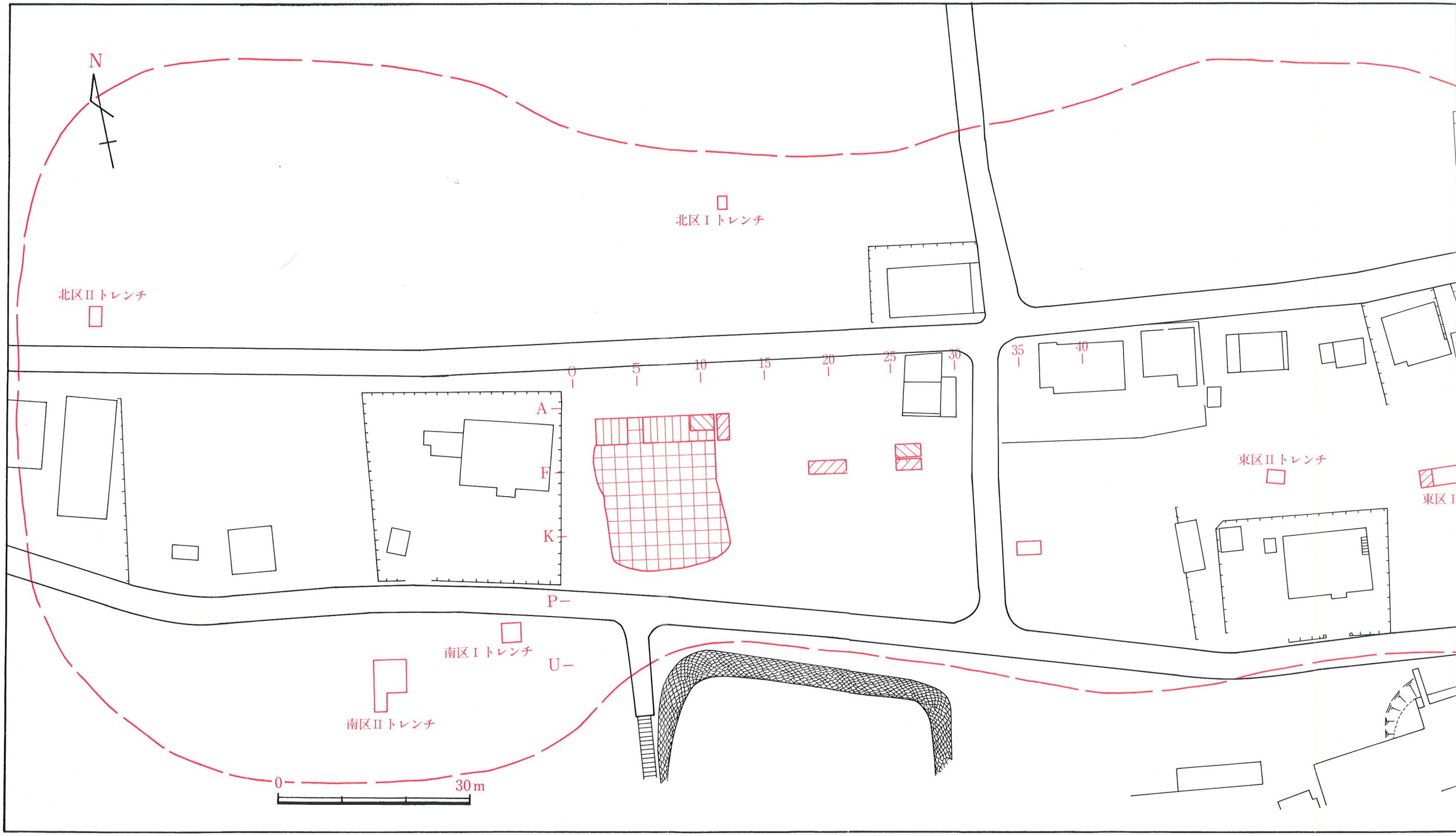
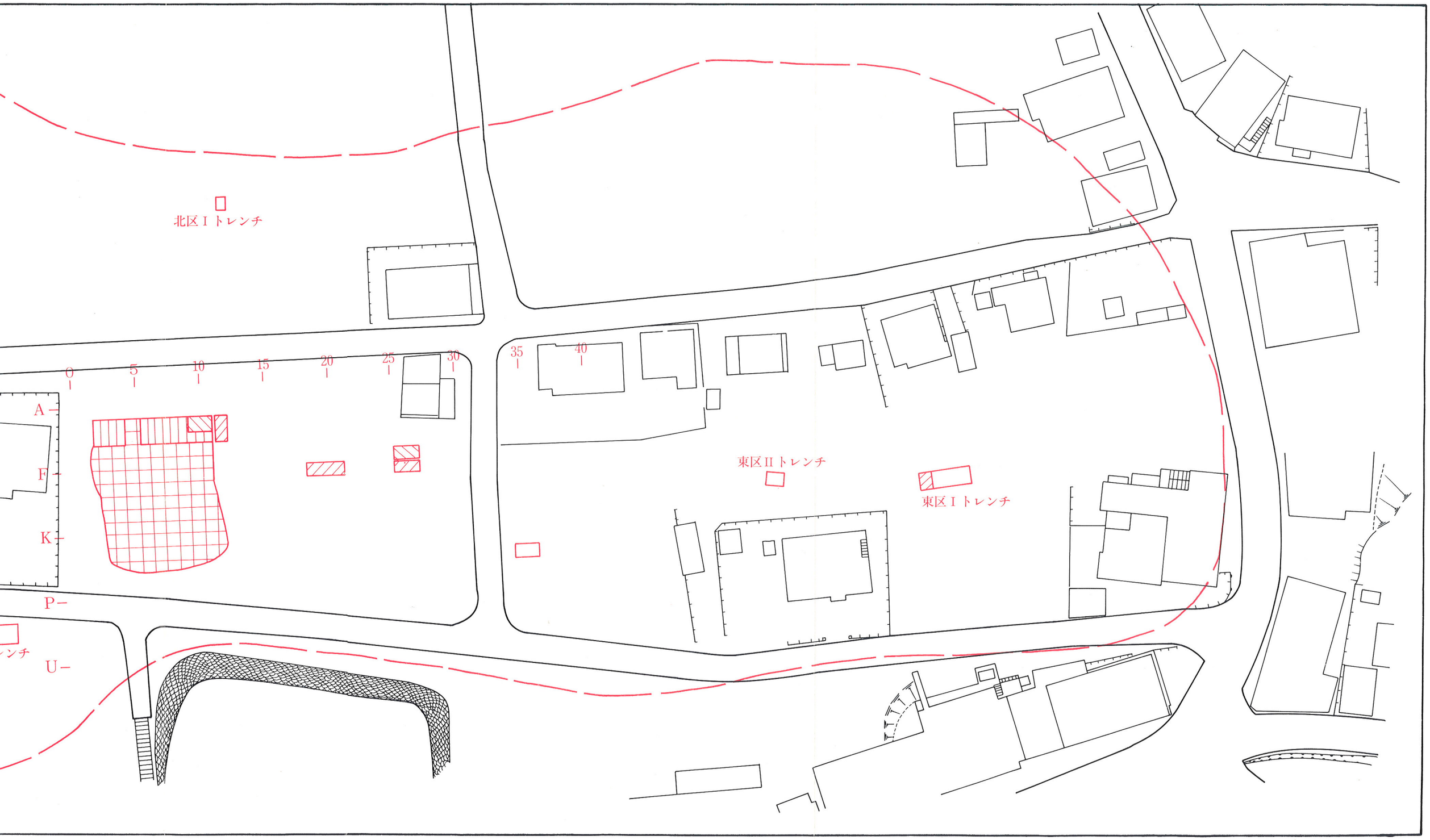


Fig.4 具志原貝塚の推定範囲及び発掘トレンチ


北区Ⅰトレンチ
0
5
10
15
20
25
30
35
40
A
F
K
P
U
東区Ⅱトレンチ
東区Ⅰトレンチ

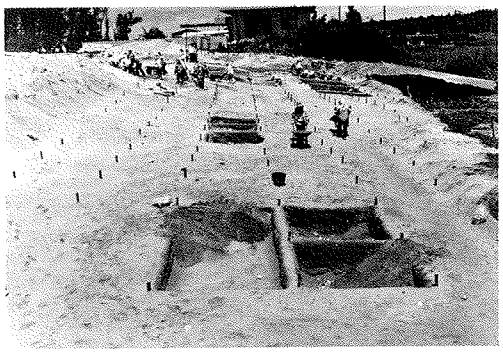
調査の経過

発掘調査は昭和59年4月23日から同年8月31日までと、同年12月21日から昭和60年1月25日までの二度に亘り実施した。一次調査は採砂工事に係る緊急発掘であったが、後述するように保存良好な遺物包含層や遺構が検出されたために調査を一時中断し、後日遺跡保存を目的とした周辺部の確認調査（二次調査）を実施した。以下、調査経過について述べる。

発掘区はFig. 4に示したとおりで、一次調査では村道に沿って基準ラインを設定し、2m四方を単位としたグリッドを組んだ。東西ラインは北からアルファベットを、南北ラインは西から算用数字で表わした。グリッドナンバーは南西隅の交点で指示し、C－3、D－4等とした。周辺部については各調査区にそれぞれ任意のトレンチを設定した。

一次調査は採砂予定地の西半部から開始した。発掘が進むにつれて、遺跡の予想以上の広がりと保存良好な遺物包含層及び遺構が確認された。また、遺物の包含量も著しくⅦ層に達するまでかなりの日程が費やされた。そこで、Ⅶ層以下の状況を確めるためにC－8・9グリッドを試掘した結果、さらに10枚の層序が確認された。最下層に沖縄早期（縄文前期相当）、その上に前・中期（縄文後・晩期相当）、間層を狭んで後期（弥生中・後期相当）の文化層がオーバーラップした複合遺跡であることが判明した。また、遺物も膨大な土器、貝類をはじめ多種多様な貝製品、骨製品、石器等が出土した。

このような状況下において、遺跡保存の立場から一時発掘を中断し、周辺への広がり及び保存状態、編年的位置づけ、性格の把握等を目的に昭和59年12月21日から再調査を実施した。前回調査区の東、南、北側にトレンチを設けて発掘した結果、東区は前回の調査区にほぼ対応する遺物包含層が確認できた。南区では人骨が数体検出され、それと共に土器や有孔メンガイ、有孔イモガイが副葬品として出土した。土器型式より沖縄後期に位置づけられるもので、該期の墓制のあり方はもとより集落址との対応関係が把握できた。北区は地形的にもかなり低く、後期には Back marshが形成されていたものと考えられたが、一部に砂丘の堆積がみられ、沖縄前期の包含層が確認できた。（玉城朝健）



一次調査

二次調査

PL.2 調査状況

層　　序

緊急調査の際の西区（12ライン以西）において17枚の層序が確認された。XII層まで沖縄後期（弥生相当期）、その下に同中期（縄文晩期）、前期（縄文後期）、早期（縄文前期）の包含層が整然と堆積し、稀にみる複合遺跡であることが判明した。その後、確認調査で東区（F－25・26グリッド）を発掘した結果、西区において確認された沖縄後期の層序はほぼ対応関係にあるが、中・前期の文化層は欠落している。最下層から条痕文土器が出土し、早期の文化層は当該区まで延びていることが確認された。また、県指定史跡地においても層序確認のために試掘（Ｉトレンチ）した。本区は1963年と1970年に故友寄英一郎氏（琉球大学）が中心となって発掘調査を実施した地区で、その際の発掘トレンチ（３ヵ所）に対応するかたちで北西隅に2.5×6mのトレンチを設定した。その結果、地山も含めて10枚の層序が確められ、うち文化層は２枚（いずれも沖縄後期）からなっている。1970年の調査で最下層から赤連系土器（室川下層式土器）が出土したとのことであるが、今回の調査では１点も得られなかった。

以下、各調査区における層序について略述する。なお、F-25・26については西区の層序と対応関係にあるため割愛し、図示（Ｆｉｇ.６上）するに留める。

西区（Fig.5）

Ｉａ層（灰褐色砂層）

耕作土で20～40cmの厚さを有し、調査区全面を被覆する。後期土器と共に後代遺物を含む。

Ｉｂ層（白色砂層）

層厚は20～160cmあり、北側で最も厚い。無遺物層である。

II層（茶褐色混貝砂層）

層厚は30～50cmあり、南側で最も厚い。シャコガイやサラサバテイなどの大型貝が著しく、土器等も多量含んでいる。

III層（白色混貝砂層）

層厚は20～50cmあり、遺物は比較的少ないが復元可能な大形の土器片が目立つ。貝の集積遺構が１基検出された。

IV層（暗褐色混貝砂層）

層厚は30～60cmあり、遺物を最も多く含んでいる。弥生土器を若干含む。

V層（淡黄褐色砂層）

層の状況はIII層と同様である。貝の集積遺構も１基検出された。

VI層（暗褐色混貝砂層）

層厚は20cm前後と相対的に薄いが、遺物の包含量は著しい。沖縄に産しない鉄鉱石が数点出土した。

VII層（黒色混貝砂層）

20～70cmの厚さを有する。灰が多量に混入している。床面において貝の集積（７基）や土坑、柱穴等の遺構が検出された。

VIII層（淡黄褐色砂層）

層厚は20～30cmと薄いが、土器等をわりと含む。弥生土器（免田式等）も比較的まとまって出土。ガラス製小玉も１点出土した。

IX層（黒色混貝砂層）

VII層と同様に灰の混入がみられ、しまりのある硬い層である。層厚は20cm前後と薄い。

X層（白色混貝砂層）

層厚は20～30cmと薄いが、遺物の包含量は多い。

XI層（暗褐色混貝砂層）

他の混貝砂層に比べて貝の量は極めて少ない。層厚は20～40cmを有する。

XII層（黒色砂層）

20～30cmの層厚であるが、遺物の包含量は比較的多く、大形の土器片が目立つ。

X III層（白色混軽石砂層）

層厚は20cm前後で、軽石を多量含む無遺物層である。本層を境に上層は弥生相当期、下層は縄文相当期に区分できる。

X IV層（茶褐色砂層）

層厚は130cm前後と厚く、沖縄早～中期の土

器が混在している。貝類等は比較的少ない。

XⅤ層（黒色砂層）

層厚は20cm前後と薄いが、沖縄早期（縄文前期相当）の単純層である。

XⅥ層（茶褐色混土砂層）

層厚は10cm前後と薄く、地山への移行層である。室川下層式土器や条痕文土器が若干陥入している。

XⅦ層（赤褐色土層）

いわゆる地山で、島尻マージと呼ばれている琉球石灰岩の風化土である。

東区Ⅰトレンチ（Fig.6下）

1層（暗褐色砂層）

現耕作土で後代遺物と共に若干の後期土器片を含む。

2層（橙褐色砂層）

客土されたもので、遺物をほとんど含まない。

3層（白色砂層）

層厚は平均60cmと厚いが後代遺物も若干含む。本層までは攪乱層である。

4層（黒褐色砂層）

旧表土と考えられ、遺物をほとんど含まない。層厚は40cm前後である。

5層（黒褐色混貝砂層）

サラサバテイやシャコガイなどの大型貝と土器を多量含むプライマリーな包含層である。層厚は50cmと比較的厚く、中位の一部に灰層がみられる。広田上層タイプの貝札とゴホウラ製貝輪が出土。

6層（白色砂層）

いわゆる間層を呈するもので、遺物はほとんど含まない。

7層（淡黄褐色砂層）

層厚は20cm前後で遺物の量は比較的少ない。

8層（黒褐色混貝砂層）

2枚目の文化層であるが、5層に比べて大型貝が少なく、土器も若干異なっている。

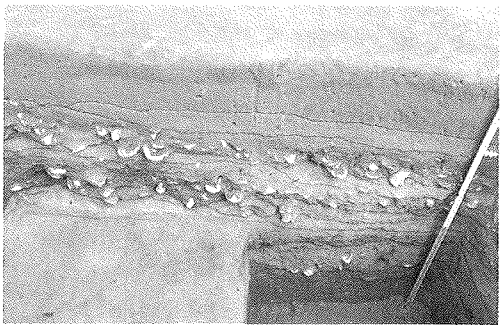
9層（茶褐色混土砂層）

地山への移行層である。土器等の陥入がみられ、上部においてウニの棘が集中して出土している。

10層（赤褐色土層）

いわゆる地山で、島尻マージとよばれる琉球石灰岩の風化土。　（玉城朝健）

11ライン東壁

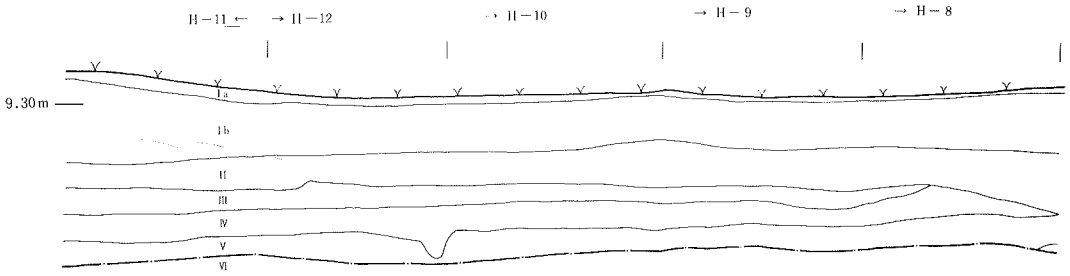


F－25・26北壁

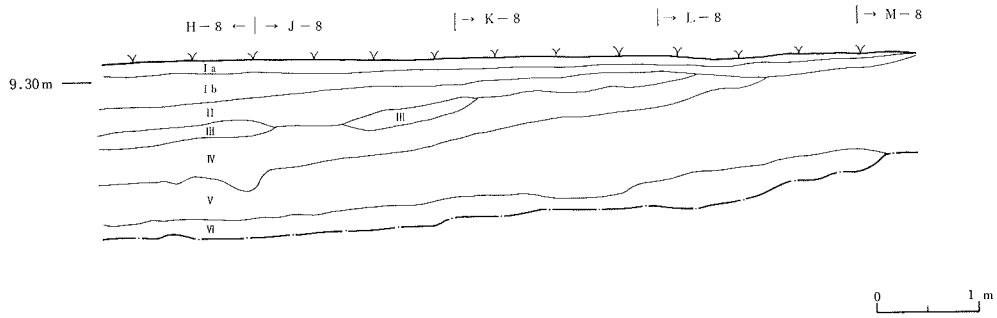
F－26東壁

PL.3 土層壁面

Hライン南壁



8ライン東壁



試掘溝（ C－8.9グリッド）側壁

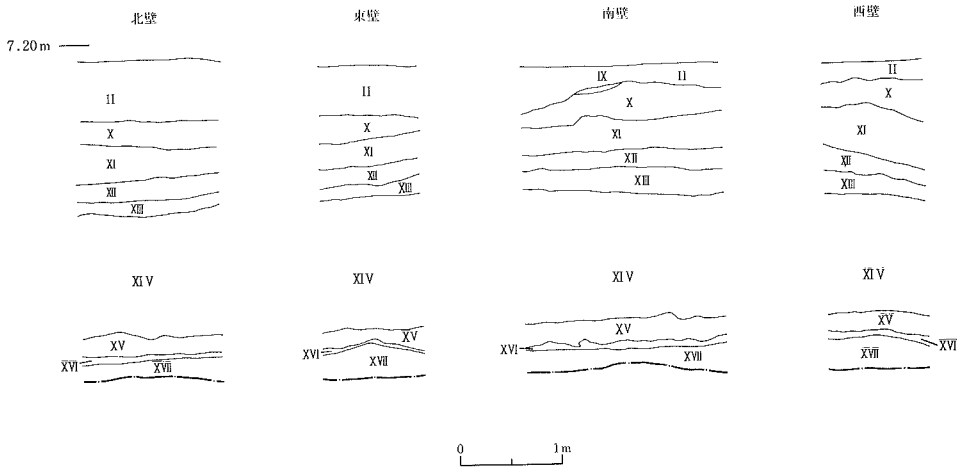


Fig.5 西区の層序

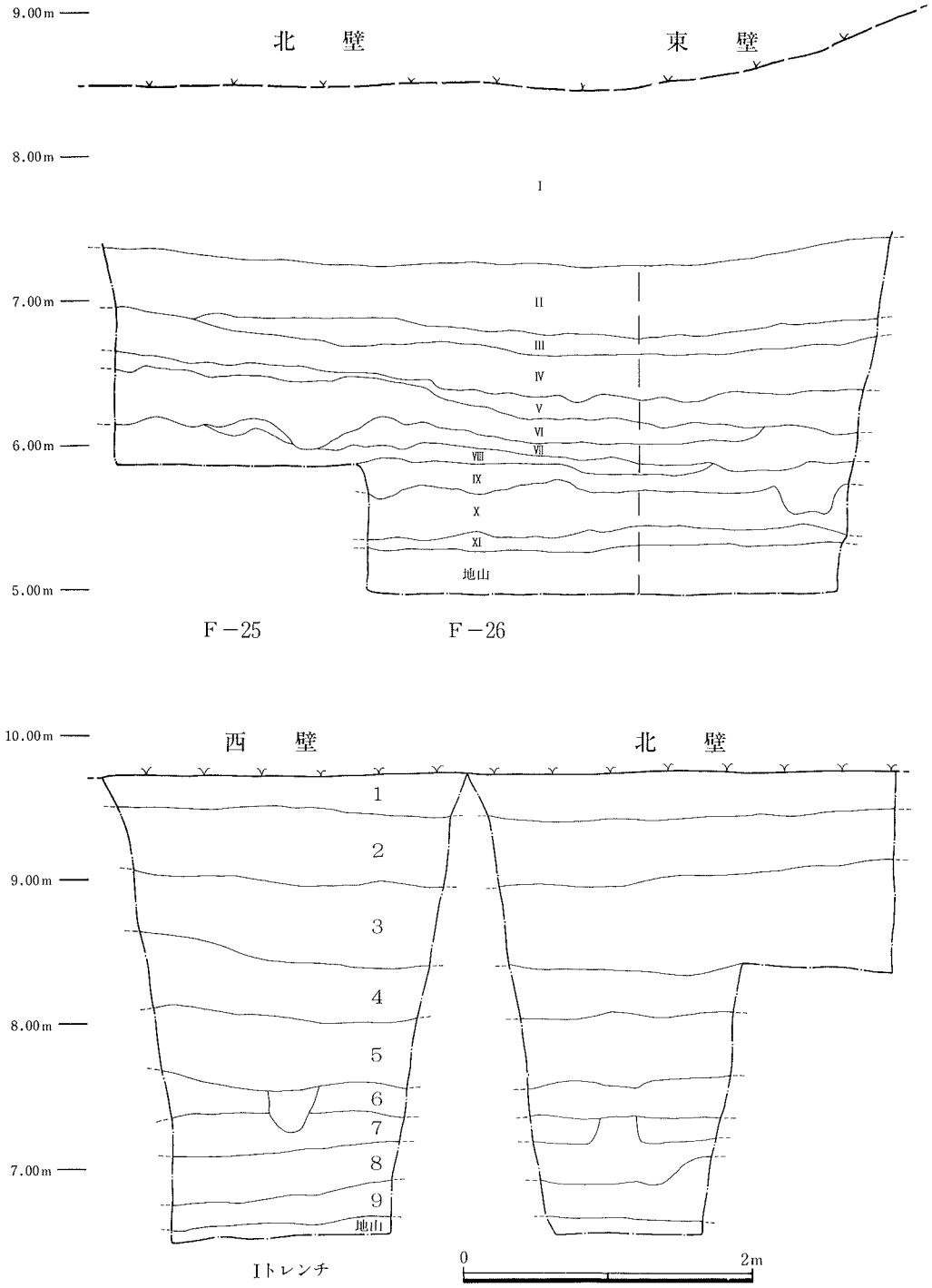
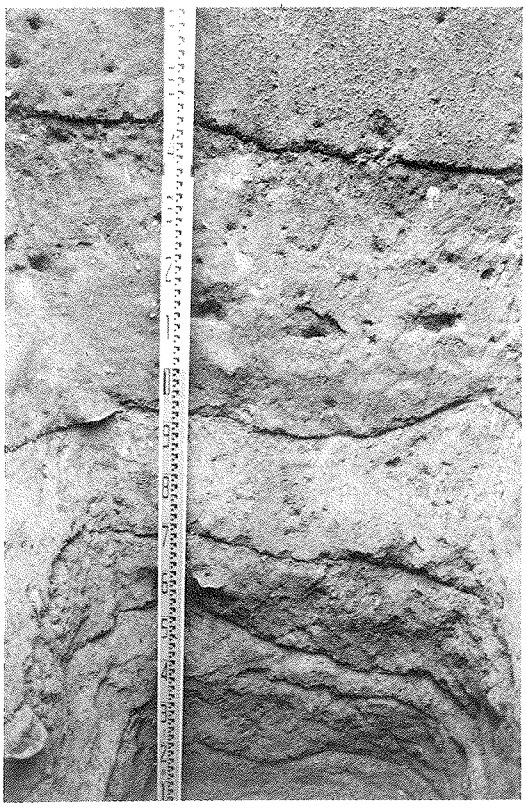
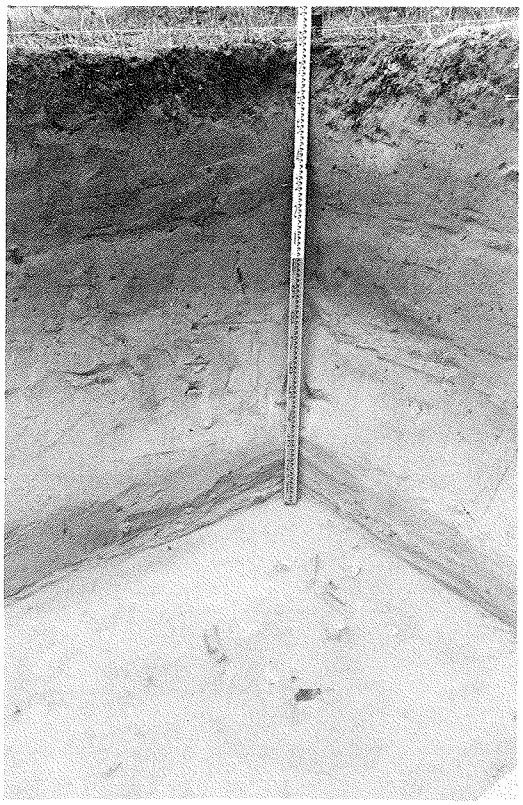


Fig.6 試掘トレンチの層序

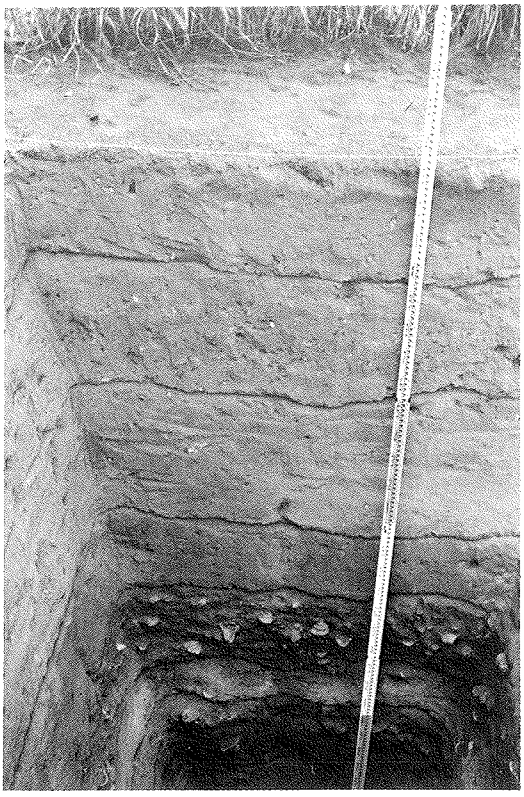


東区IIトレンチ



南区IIトレンチ

西　壁



北　壁

東区Iトレンチ

PL.4 試掘溝土層壁面

遺　構

一次調査においてイモガイ（アンボンクロザメ）、マガキガイの集積や炉址、土坑、柱穴等の遺構が検出された。二次調査では南区において沖縄後期の墓地が確認された。

生活址（居住地域）における遺構はⅢ層(炉址・貝集積)、Ⅴ層（貝集積）、Ⅶ層(貝集積・土坑・柱穴）で検出されたが、ここではⅦ層の遺構について述べる。Fig. 7、8に示したとおり貝の集積が7基検出され、うち5基(3号～7号）はイモガイ、2基（8・9号）はマガキガイの種構成である。3・4号は径40～50cmの範囲に50～60個のイモガイを4段に積み上げ、殻頂部を外側に向けて円形に配列している。5・6号も個数は少ないが同様な配列で2段に積み、後者は中央部に1枚のシャコガイを覆っている。7号は配列が異なり4個のイモガイの殻頂部を一方向にして積み上げている。いずれも掘り込みはみられず、床面に直接積み上げたようである。8・9号も殻頂部を外側へ向けて円形に配列しているが、床面を若干掘り込んで、その中に整然と並べている。

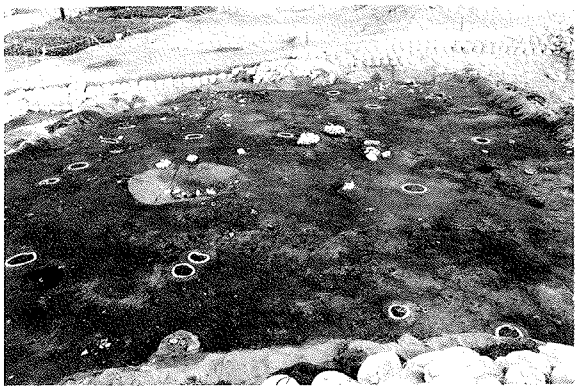
土坑は径2mの円形プランをなし、深さ50cmの逆円錐形を呈する。坑中から土器やたたき石、ヤコウガイ製匙の未製品、貝類などが出土している。

柱穴は貝の集積、土坑をとり囲むかたちで周辺部に見受けられる。同時期のナガラ原西貝塚の例からすると、ほぼ長方形のプランを呈すると考えられ、何らかの施設があったことが窺える。

南区では2枚の層から人骨が検出された。Fig. 9はⅠトレンチのもので、5層（白砂）において検出された。1体分で、人骨の状態より仰臥屈葬であることが考えられる。頭はほぼ東に向き、足元と右肩付近に殻頂部を穿孔したイモガイ（アンボンクロザメ）が副葬されている。土器等の出土がなく、現時点では時期決定できないが、砂丘の堆積状況より先史時代のものと思われる。

Fig. 10に示したものはⅡトレンチ7層で検出されたものである。人骨はかなり散乱し、頭蓋骨は1点であるが、四肢骨より3～4体分であることが判る。また、副葬品として土器（沖縄後期）や有孔メンガイ（86枚）、貝類が散見できる。特に有孔メンガイの副葬例は渡名喜島の西底原遺跡に次ぐもので、この時期の葬制の一端を窺い知ることのできる貴重な事例である。

人骨の形質的な特徴については専門家の鑑定を待って検討したい。　　（岸本義彦）



PL.5 Ⅶ層の遺構（西側より）

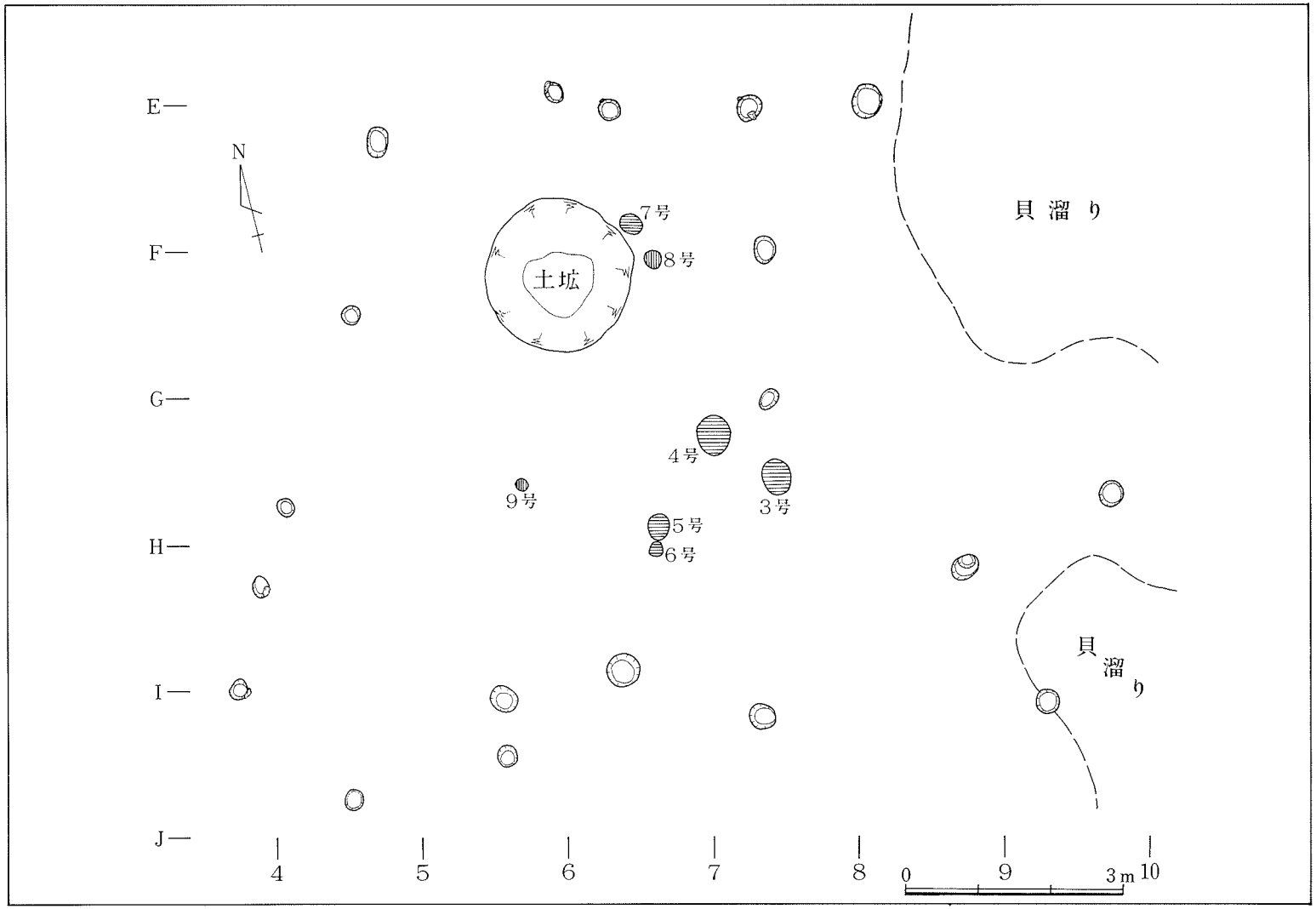


Fig.7 Ⅶ層で検出された遺構配置

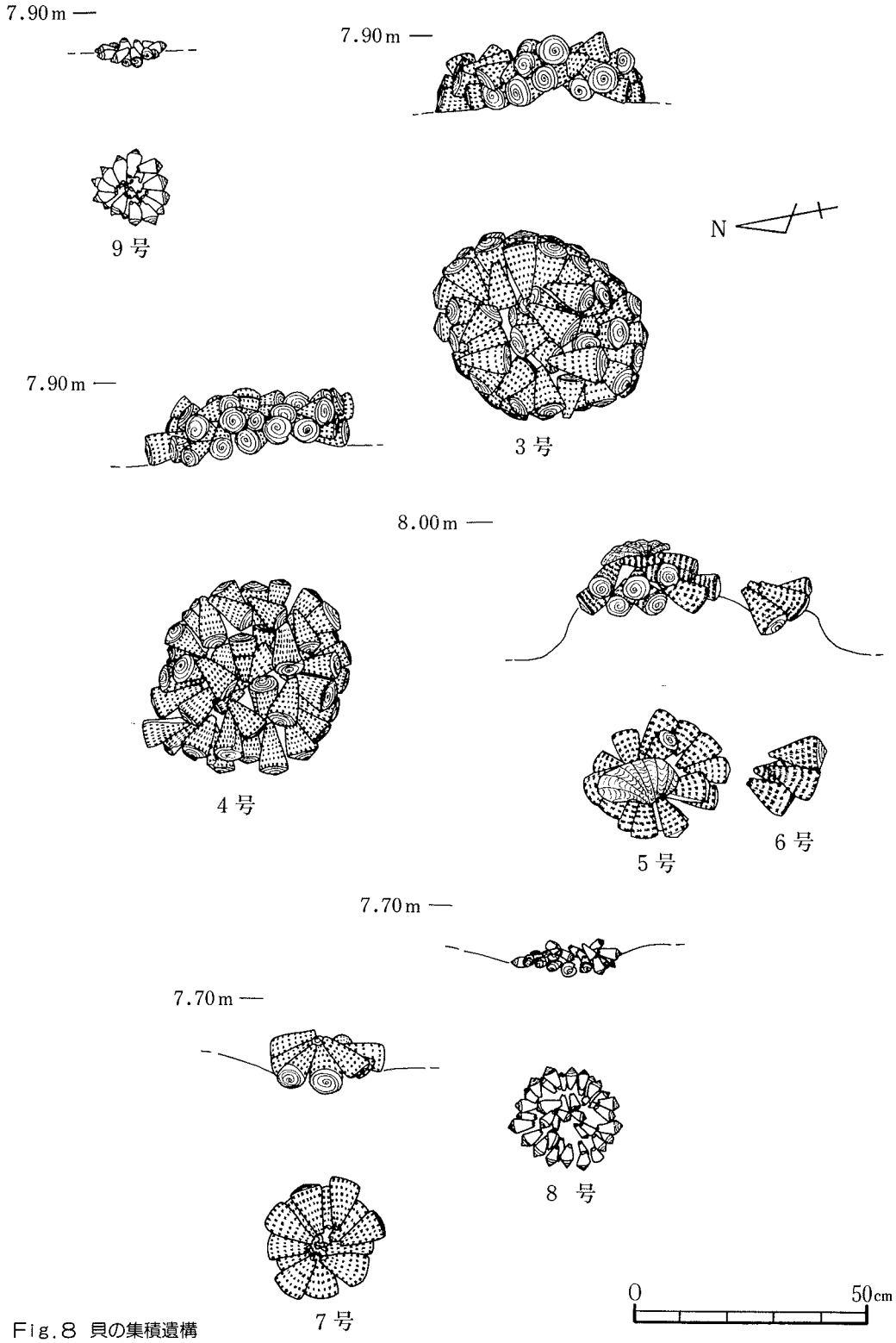


Fig.8 貝の集積遺構

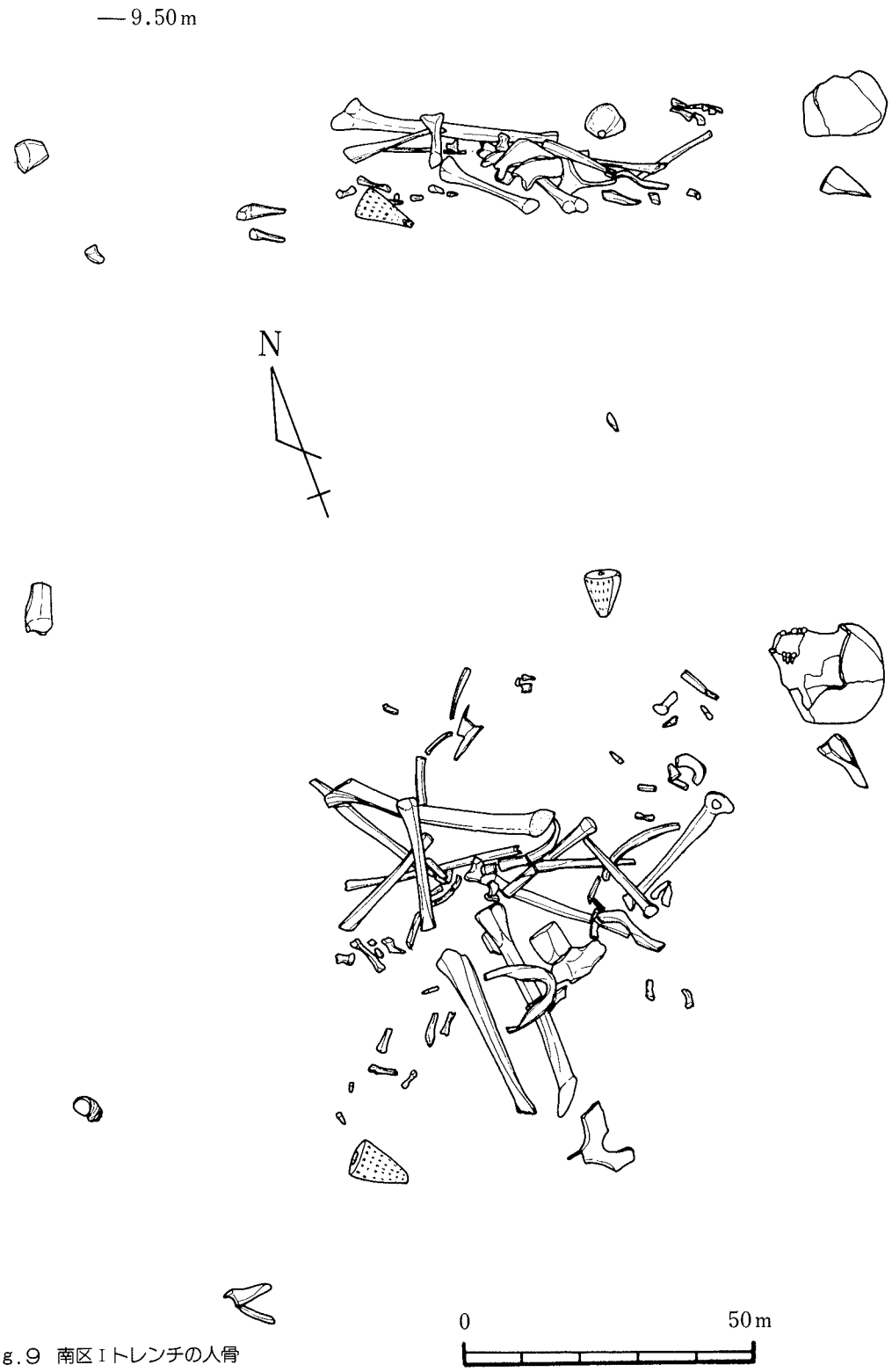


Fig.9 南区Ⅰトレンチの人骨

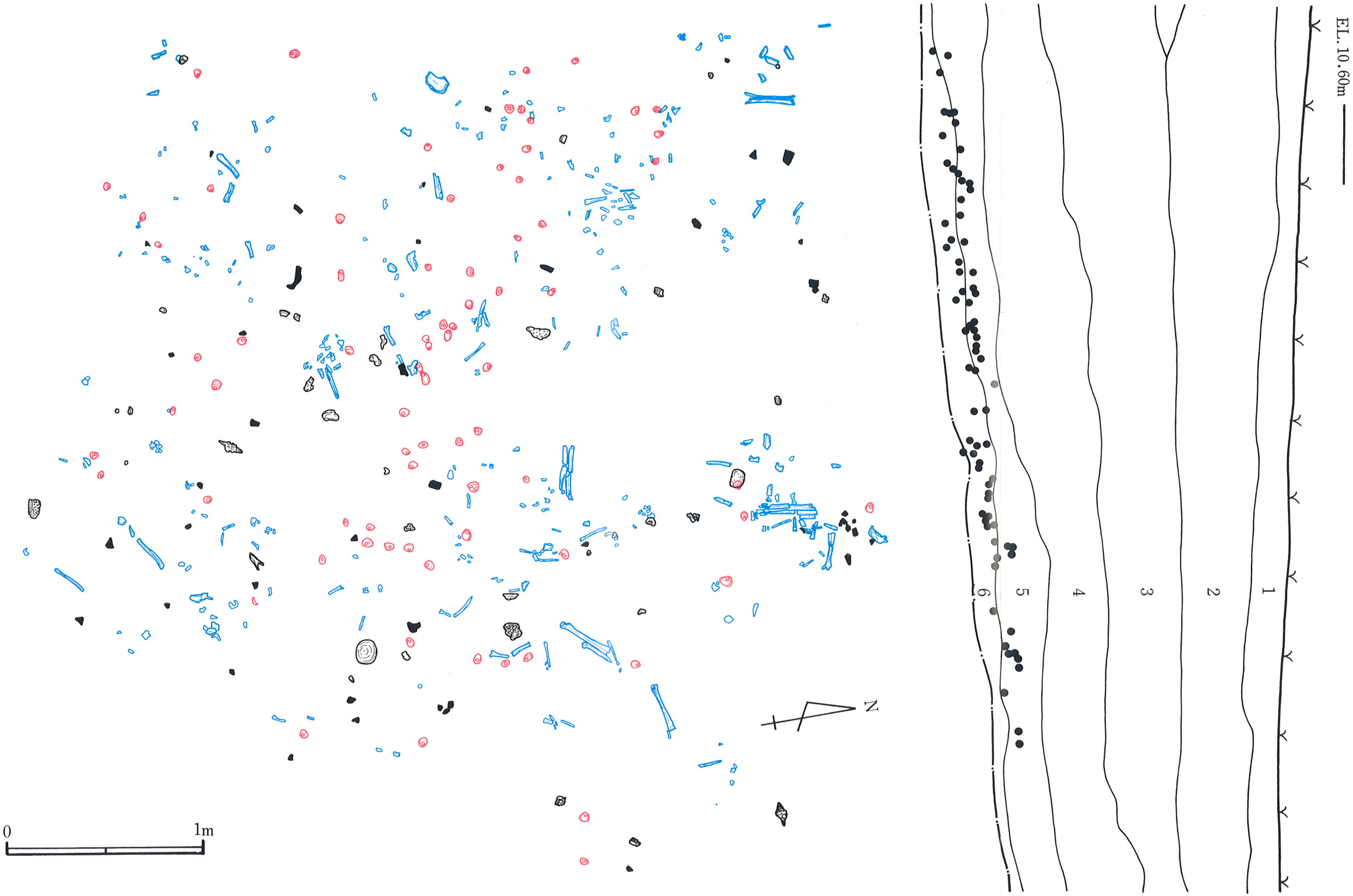
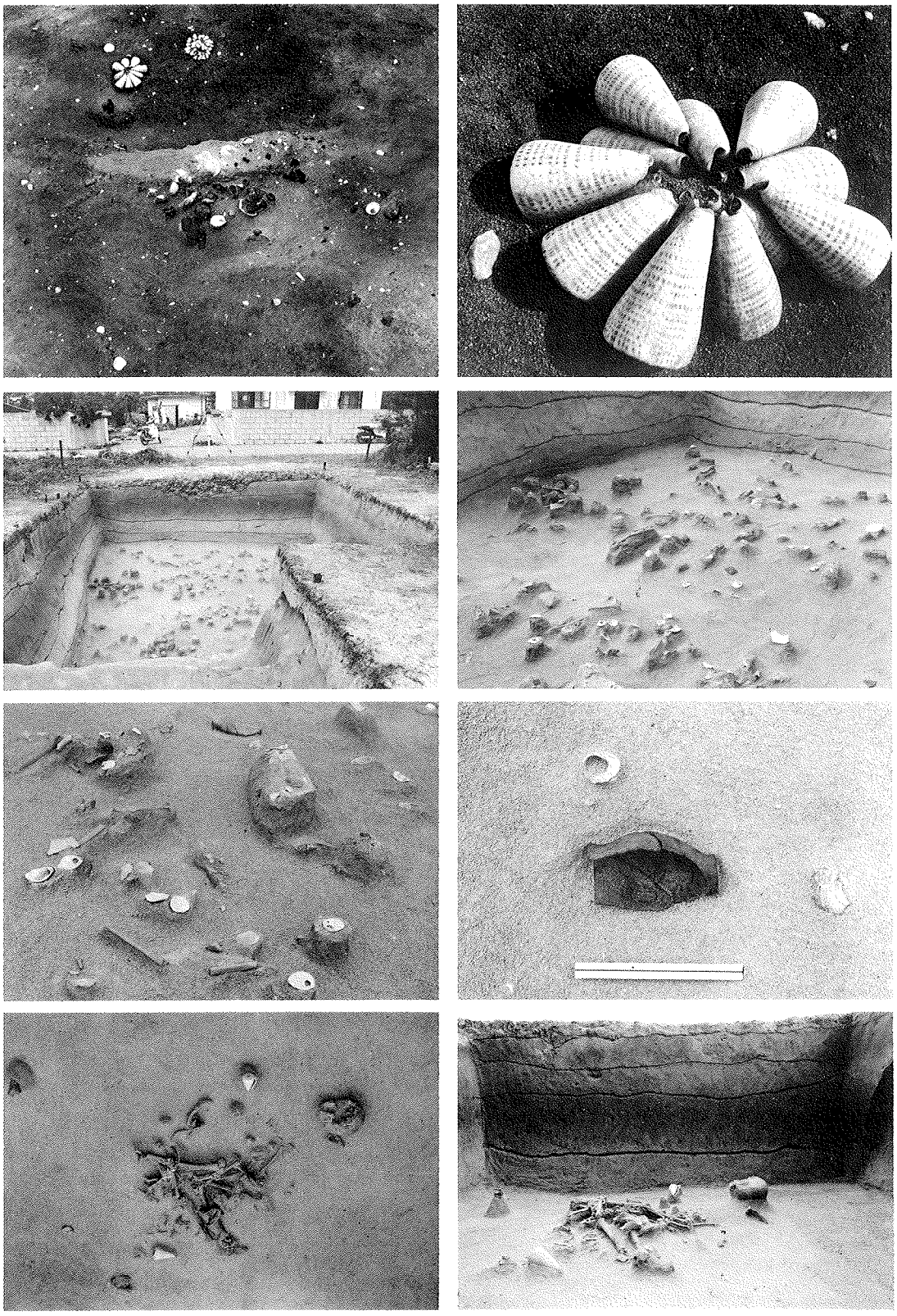


Fig.10 南区Ⅱトレンチの人骨等出土状況及び土層壁面

スミベタ：土器　青：人骨　朱：有孔メンガイ　●有孔メンガイ



PL.6 検出された遺構

遺　物

土　器

約500㎡の発掘により夥しい量の土器が出土した。実数は資料整理が途中のため把握してないが、底部資料の出土量（640点余）からでも今までの調査で例をみない数量で、それも調査区のほとんどがⅦ層面で停めていることより、なお豊富な埋蔵量が推察できる。また、3カ所において層序確認のために地山まで完掘した結果、本遺跡の時期的な面が確められた。前項で述べた層序と土器型式より本遺跡が4時期に区分され、それぞれが複合した状態で形成されている。

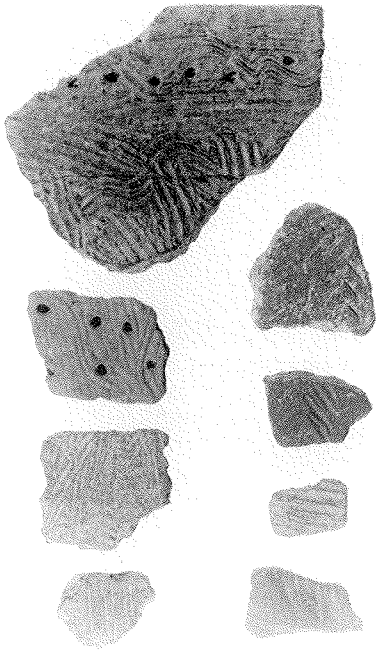
4期の文化期とは、最下層の条痕文・室川下層式土器単独の沖縄早期（縄文前期相当）、その上に伊波式・室川式土器主体の沖縄前期（縄文後期相当）、さらに宇宿上層式・宇佐浜式土器等の沖縄中期（縄文晩期相当）、間層を狭んで無文尖底土器を主体とする沖縄後期（弥生中～後期相当）である。

沖縄後期土器に伴って弥生土器が出土したことも大きな特徴である。特に「免田式土器」は宇堅貝塚に次いで2例目の検出で、比較的まとまった資料である。

以下、各時期の主要土器について略述する。なお、弥生土器については項を別にして述べる。

沖縄早期の土器

C－8・9グリッド及びF－26グリッド最下層から出土したもので、条痕文・室川下層式土器の範疇にはいる資料である。Fig.11に示したものは口縁部資料で、器表面に粗い条痕と横位に展開する竹管文を施している。内面は条痕をナデ消し、その後に口縁部付近に2条1組の線文を施している。これらの土器は量的に少ないが、全体的な特徴が伊平屋島の久里原貝塚最下層から出土した条痕文土器に類似している。



PL.7 条痕文土器

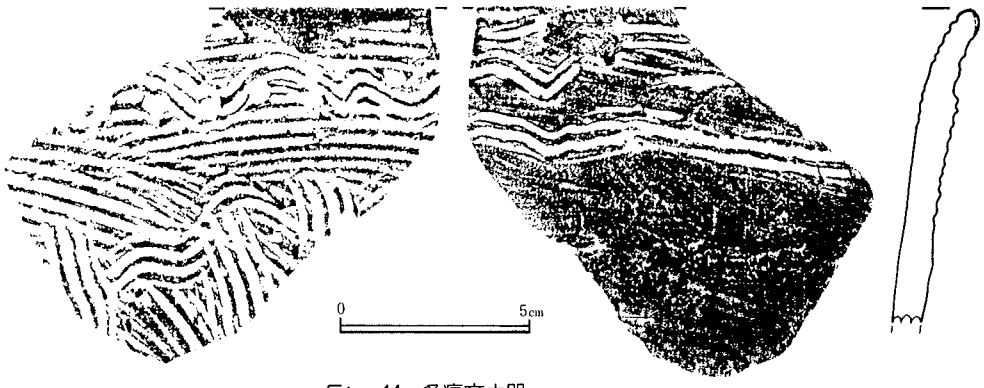
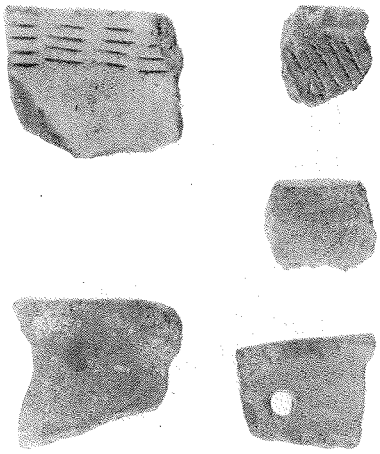


Fig.11 条痕文土器

沖縄前・中期の土器

C－8・9グリッドの試掘により得られたもので、量的には僅少である。その主要な資料をPL.8に示した。いずれも小破片で全形は窺えないが、文様や口縁部の形状より伊波式土器、室川式土器、宇宿上層式土器の深鉢形をなすものである。写真左上の伊波式土器は口縁に二条平行短沈線を横位に２組施している。その下方は無文になっているが、いわゆる中位の文様帯を空白部にするタイプと思われる。



PL.8 伊波式土器等

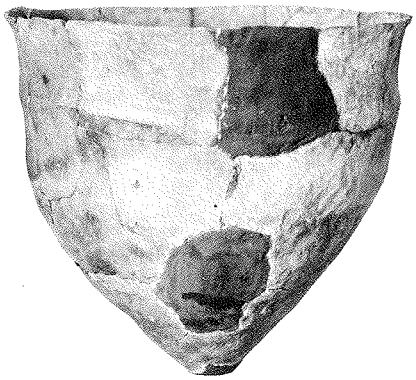
沖縄後期の土器

II層からXII層までが沖縄後期の包含層で、土器の出土量が夥しい。器種はPL.9に示した無文の尖底深鉢形が圧倒的であり、その他に壺形、甕形、浅鉢形、ミニチュア土器などがある。ここでは土器全体からみれば数少ないが、特徴のある有文土器について述べる。なお、底部資料については一括して後述する。

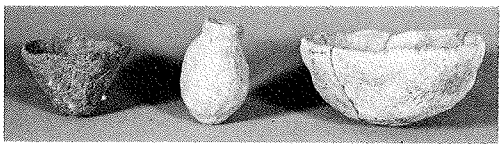
文様は浮文と沈文に大別でき、それぞれ文様構成においていくつかのバリエーションがみられる。浮文グループは２条１組の縦位の貼付文、いわゆる鞍状凸帯と称される文様が顕著である。他に鞍状凸帯の変容形と考えられるU字状、逆U字状、円形などの貼付文があり、凸帯に刻目や凹線を施すのも若干みられる。また、横位の凸帯文も僅かながら見受けられる。沈文グループには口縁に縦位もしくは斜位の短い凹線文を施すものが多く、各層位から出土している。他に曲線文や不定形の線文、横捺刻文などがある。PL.14の左上に示したVII層の土器は絵画様の線文を施し、従来の後期土器に見られない手法である。

それらの主要土器を各層ごと写真に示したが、層位間の文様の変化はほとんど見られない。本遺跡の後期の文化層は７枚からなるが、それほどの時間差はないものと考えられる。また、今回示し得なかった資料も含めて土器全体を概観すると、本貝塚の西方約2kmに位置するナガラ原西貝塚のそれに酷似するようであるが、現時点で両者の相関関係は判然としない。そのことは本報告に委ねることにする。

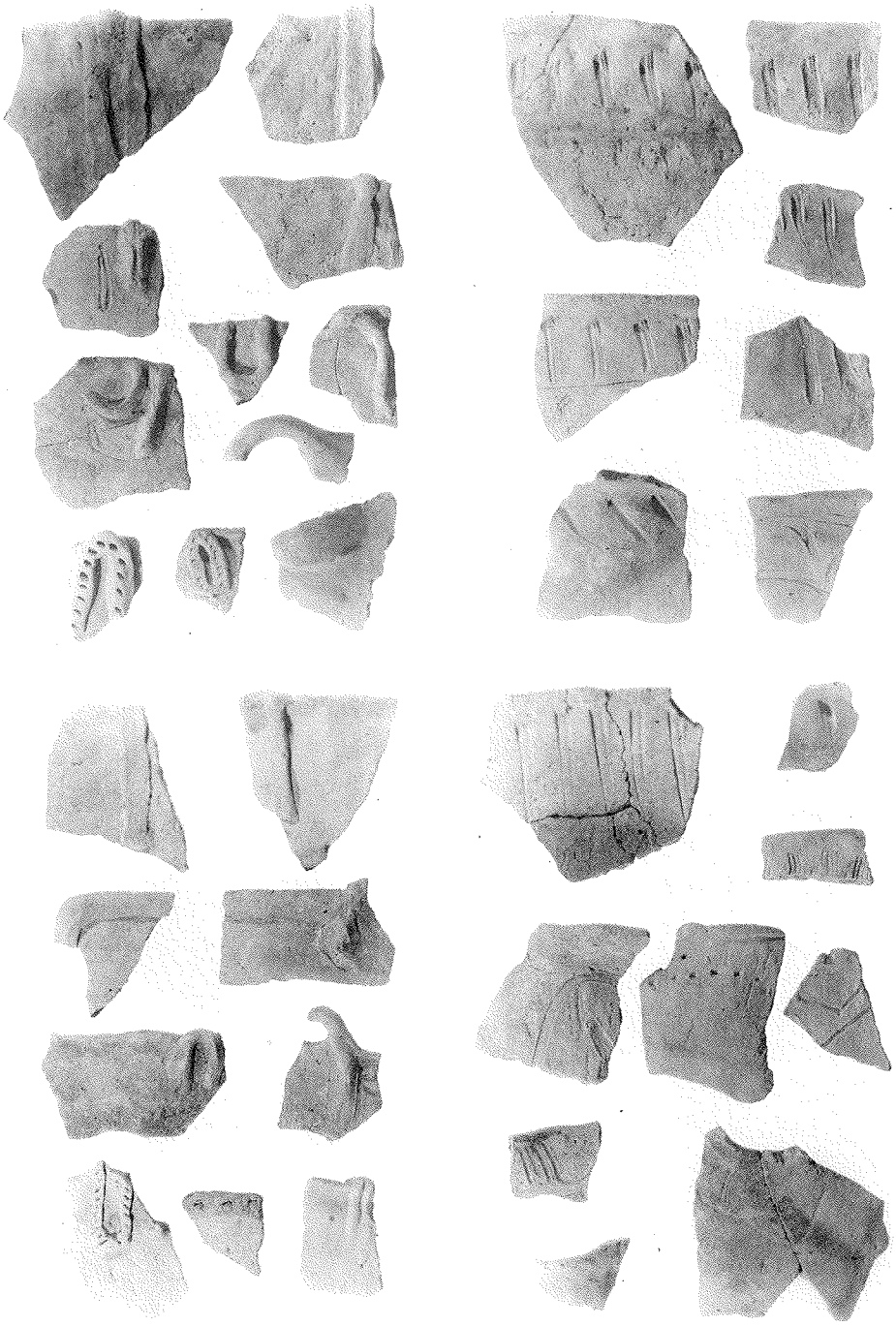
（岸本義彦）



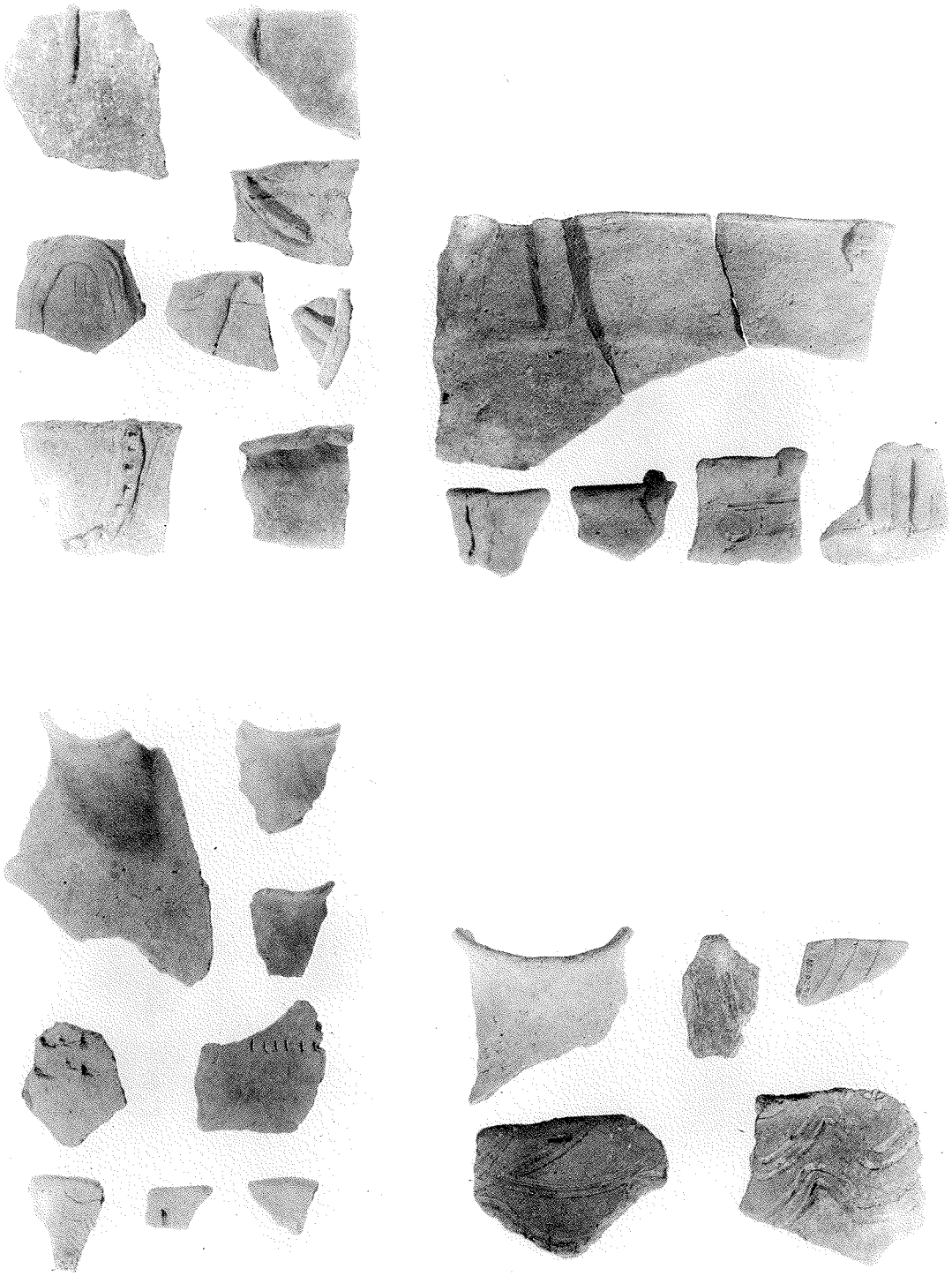
PL.9 無文尖底土器（外耳）



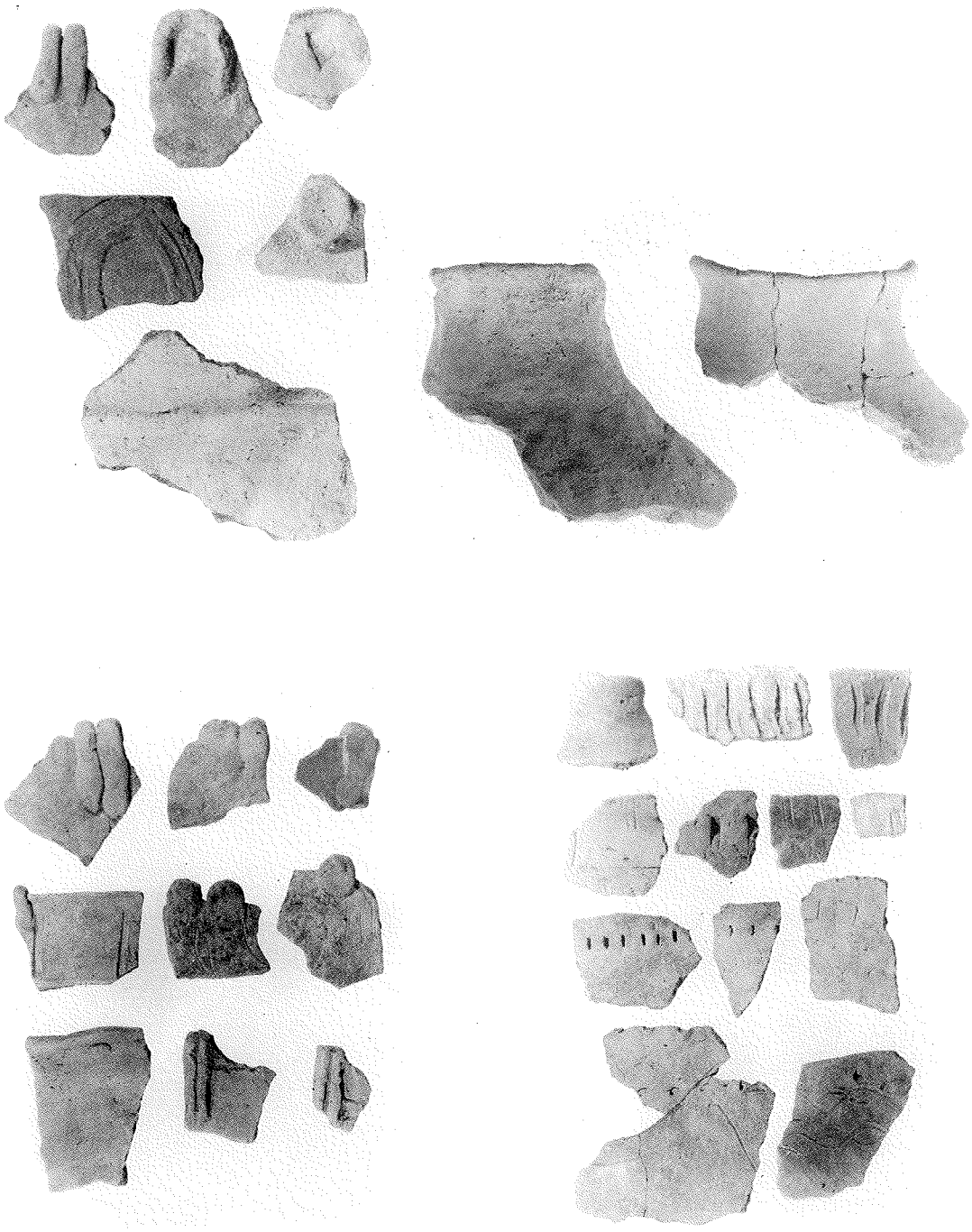
PL.10 ミニチュア土器



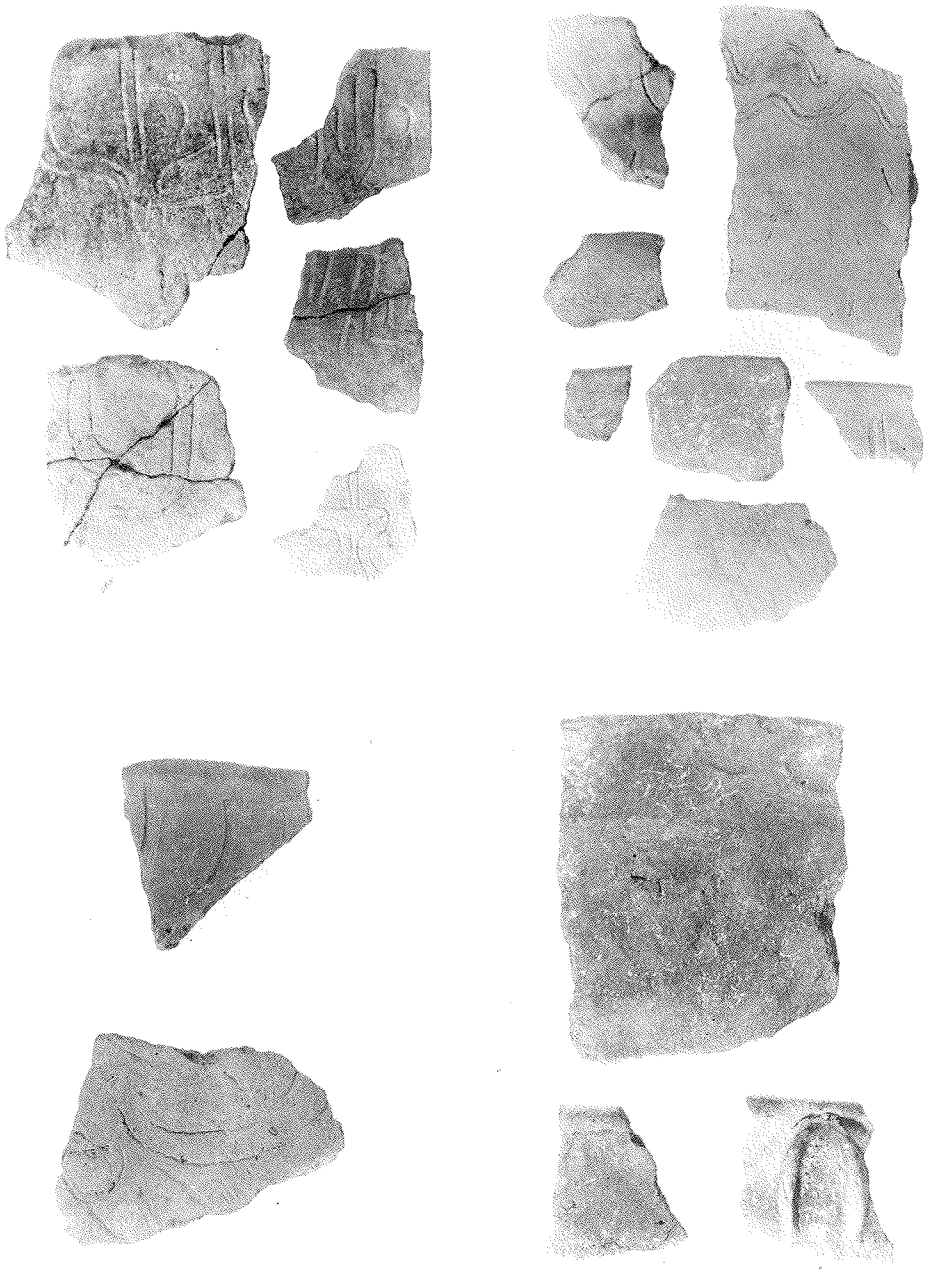
PL.11　上：II層の土器
　　下：III層の土器



PL.12　左：Ⅳ層の土器
　　右：Ⅴ層の土器



PL.13 上：Ⅵ層の土器
下：Ⅶ層の土器



PL.14　左上：Ⅶ層の土器　　右上：Ⅷ層の土器
　　左下：Ⅸ層の土器　　右下：Ⅺ層の土器

底　　部

今回の調査で得られた沖縄後期土器の底部資料は643点以上である。底部は土器の個体数と密接な関係があることからほとんどぬきだし、それらを層位別、形態別に分類集計を試みた（Table１）。

形態的な面から尖底、丸底、平底、脚台、特殊の５とおりに分類し、それぞれをタイプ別に細分した。各タイプの特徴を列記すると、Ａは砲弾状の尖底をなすもの。Ｂはいわゆる乳房状尖底と称されているもの。ＣはＢの底面を押しつぶした形になるもの。ＤはＣの底面を押しあげ、若干の上げ底を呈するもの。Ｅは丸底をなすもの。Ｆは立ちあがりの角がなく、丸底的な平底を呈するもの。Ｇは立ちあがりが直になるものであるが、いわゆるくびれ平底とは形状を異にする。Ｈは脚台状を呈するものである。

それらを器種との関係で今までの成果より分類すると次のとおりになると考えられる。

甕形土器――Ｇ・Ｈ
深鉢形土器――Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ
浅鉢形土器――Ａ・Ｄ
壺形土器――Ａ・Ｅ

タイプＡは甕形を除く３器種ともにみられ、より詳細な検討が必要であるが、その他のタイプに関しては器種分類が比較的容易である。

数量的にはタイプＣ・Ａ・Ｂが圧倒的に多く、タイプＤも含めた尖底グループが全体の88.4%を占めている。このような傾向は沖縄後期遺跡における土器のあり方としてひとつの特徴を示すものである。底部をみた限りにおいて遺跡を分類すると、本貝塚のように尖底が主体をなす遺跡、くびれ平底が主体をなす遺跡、両者がほぼ同数出土する遺跡の３とおりになる。そのことが時期差を示していると考えられているが、今だ確定的な情況証拠は把えられてない。ただ、弥生土器の出土している遺跡のほとんどが尖底主体であることはひとつのメルクマールになると考えられる。

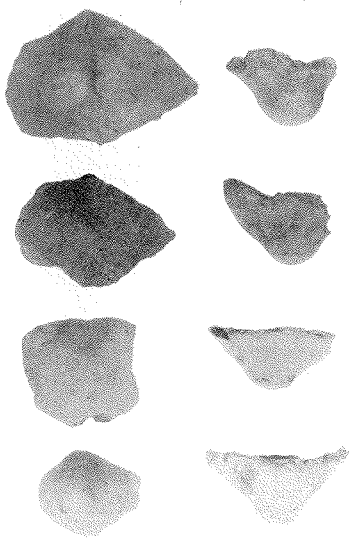
（岸本義彦）

Table 1 後期土器底部の類別集計

形態／タイプ／層位	尖底 A	尖底 B	尖底 C	尖底 D	丸底 E	平底 F	平底 G	脚台 H	特殊 I	小計	不明	計
II 層	52	20	9	8	3	5	2			99	93	192
III 層	8	20	51	5	1	3		1	1	90	22	112
IV 層	9	17	19	4	6	5				60	24	84
V 層	10	2	1	3	11	2			1	30	19	49
VI 層	13		3							16	10	26
VII 層	7	39	49	6	6			1	1	109	48	157
VIII 層	5	2	3							10	5	15
IX 層	2	2	1							5	1	6
X 層										0	0	0
XI 層	1		1							2	0	2
計	107	102	137	26	27	15	2	2	3	421	222	643+α
個数／比率(%)	372/88.4				27/6.4	17/4.0		2/0.5	3/0.7	421/100		

※Ｉ層は表土層のため集計から除外。
※比率は小計による。
※総計の＋αは完形品、ミニチュア、層位不明のものを含む。

タイプA



タイプB

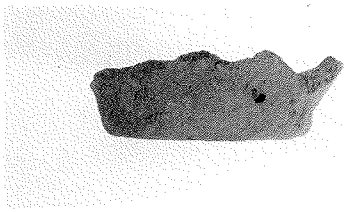
タイプC

タイプD

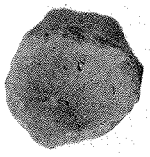
PL.15　底　部（1）

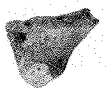
タイプE

タイプF



タイプG





タイプH

タイプI

PL.16　底　部（2）

弥生土器

沖縄における弥生土器の出土例は30ヵ所以上の遺跡で確認されているが、数例の土器を除いてほとんどが須玖系山ノ口式土器（弥生中期後半）である。今回の調査で検出されたものは量的に少ないが、いわゆる「免田式土器」と称されているものが比較的まとまっている。その他の弥生土器も含めて主要なものを層位別に示したのが Fig. 14である。

本遺跡の弥生相当期の層序は間層も含めて12枚からなっている。うち弥生土器が出土した層位は、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅷ・Ⅸ層である。型式名の判別可能な資料は前記した「免田式土器」のみで、他は詳細な比較検討を待たねばならない。以下、弥生土器について簡単に説明する。

免田式土器はすべて小片の胴部資料で全形は窺えないが、限られたものから特徴を列記すると次のとおりになる。器形は Fig.14 の1.12のコーナー部分より、稜線は明瞭でないがいわゆるソロバン玉形の胴部を呈し、いくぶん胴長になる。口縁部及び底部の資料はなく、それぞれの形状は不明である。器面調整の刷毛目は消えきらず残っており、裏面の調整は雑である。文様は肩部の凹線（4・5）、上向きの重弧文、コーナー部の横位沈線と縦位及び斜位の刻目が確認できる。下向きの重弧文は見出すことができない。それらの文様は単ベラ状の工具で施され、重弧文も数条単位のものはなく、すべて単線により描かれている。色調は3・8・12など表面が赤味を帯びるもの、黒褐色を呈するもの(1)、桃白色を呈するものがある。器壁は5を除いて比較的薄手である。特筆すべきものとして、胴のコーナー部に小孔を有する資料がある。12がそれで、一次穿孔と考えられる。九州の資料には粗孔を穿つ例はあるが、本標品のような穿孔例はないとのことである（小田富士雄氏御教示）。

その他の弥生土器としたものは小片すぎて型式名の判然としないものを一括した。13は甕形土器の底部で、胎土中に金色の雲母が著しく含まれており他の土器とは一見して異なる。14・19は刻目凸帯を有するもので、刷毛目がよく残っている。16・17・22は断面三角形の凸帯を有し、山ノ口式土器の範疇にはいるものと考えられる。18は壺形土器の口縁部で、傾きより広口の壺になるものと思われる。器表面は刷毛目調整を施す。20・21は脚部になるものと考えられる。

以上、弥生土器について簡単に述べてきたが、最後に免田式土器について概観する。

該土器は熊本県の人吉盆地を中心に分布を示すもので、型式名も球磨郡免田町の「免田」が標式になっている。これまでに数多くの調査研究がなされているにもかかわらず、その編年的位置づけや系譜の問題、性格づけなどが確立してないようである。そのことは、免

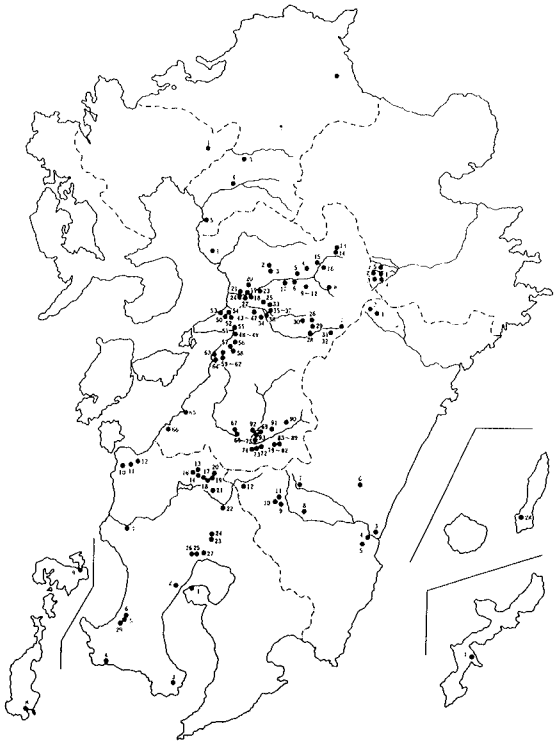
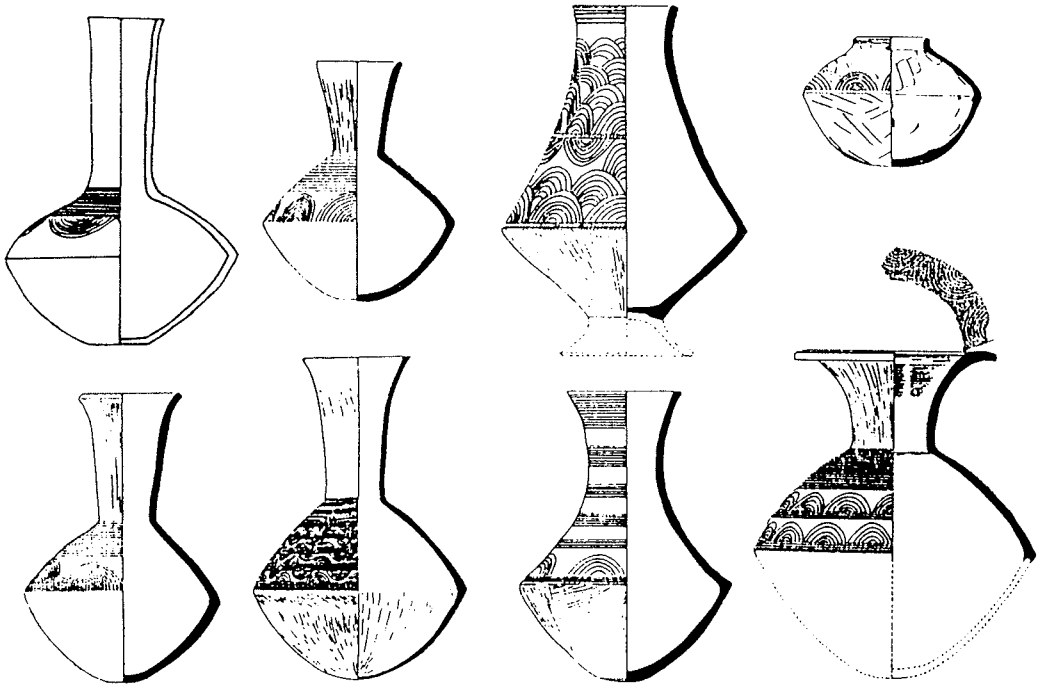


Fig.12 免田式土器出土遺跡分布
（吉永明「免田式土器研究史」より）

田式土器のもつ特殊性を浮彫りにした感がある。すなわち、出土状況が墓の供献土器としてほとんどであり、他の土器との共伴関係がよく判ってなく、器形も特異で洗練された長頸壺が多く、先行・後続型式ともに判然としないところにある。ただ、最近では出土例も増加し、上限が弥生後期前葉に位置づけられることが衆目の一致するところである。また、型式学的なアプローチも盛んに試みられているようである。

分布の範囲もFig.12に示したように、熊本県を中心に東・南九州一円はもとより奄美・沖縄の南島まで広範囲に及んでいる。本遺跡出土の資料の生産地は判然としないが、諸特徴が鹿児島の前畑遺跡や甑島の中町馬場遺跡のものに類似している。

祭祀儀礼用として特殊な性格を有する該土器が南島の遺跡のそれも包含層中から出土していることは何を意味しているか大きな問題である。沖縄でも宇堅貝塚に次いで2例目であり、それらの問題解明には類例資料の追加を待たなければならない。　（岸本義彦）



※縮尺不同

Fig.13 九州各地の免田式土器
（緒方勉「免田式土器の編年」より）

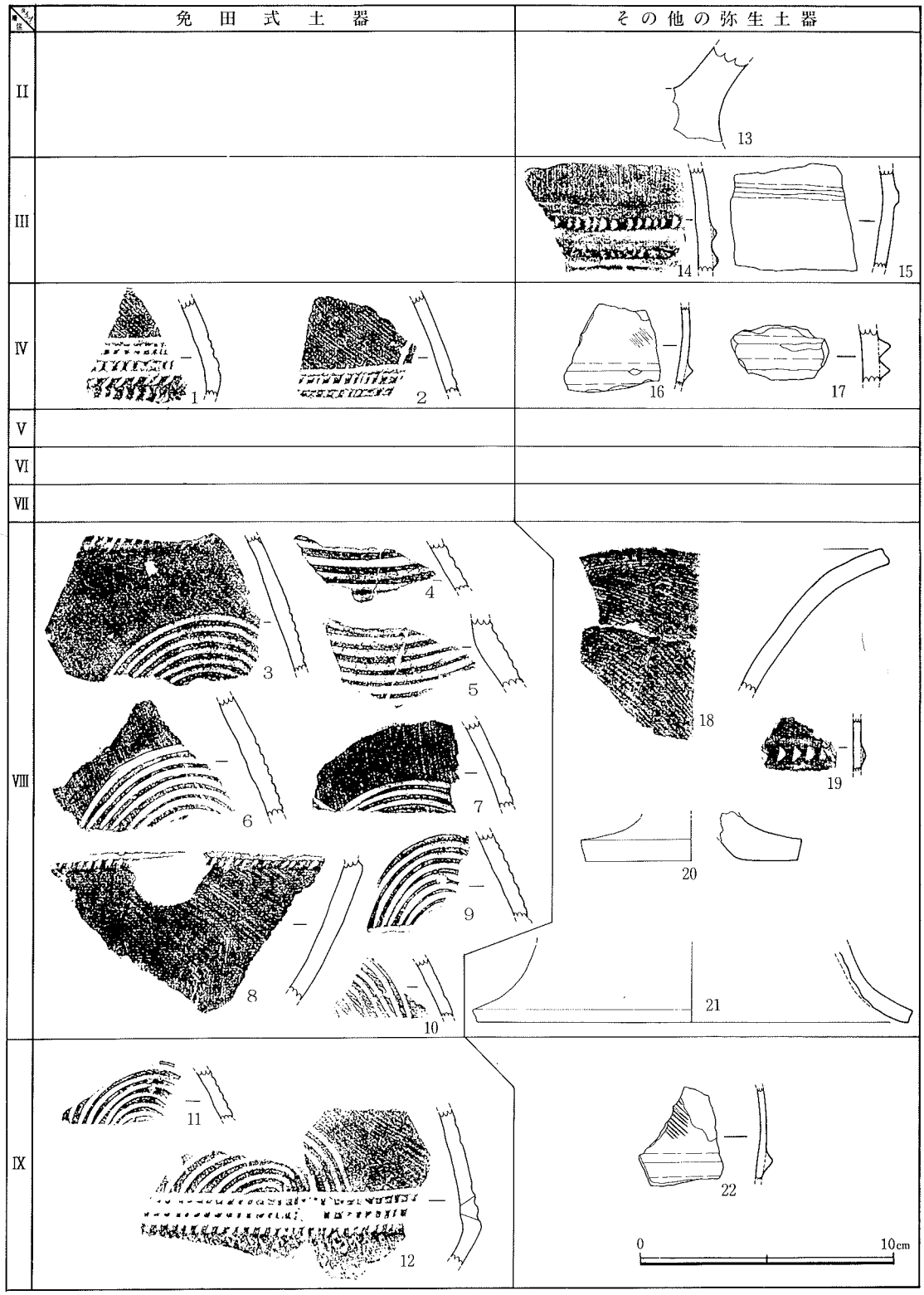
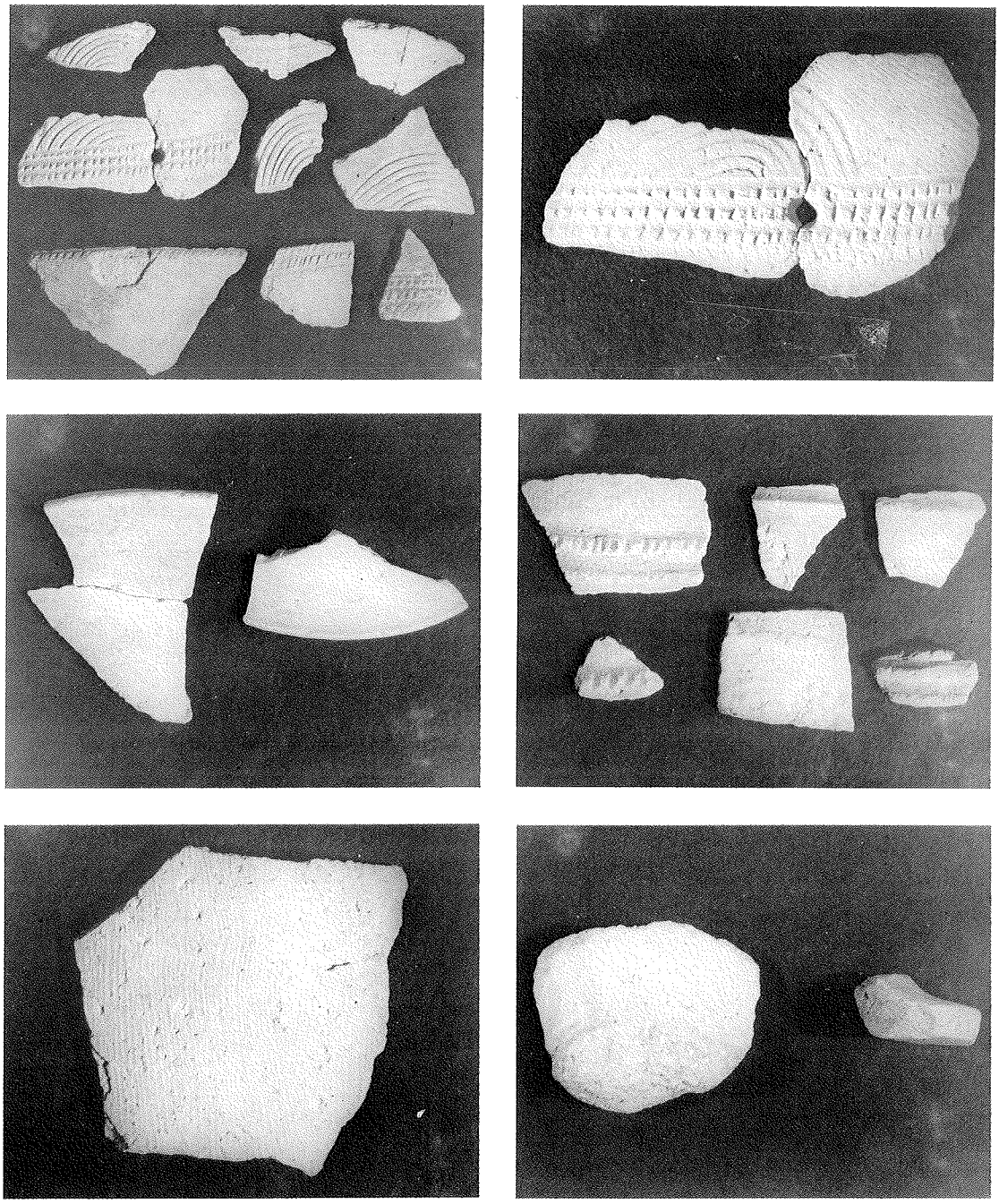


Fig.14 具志原貝塚出土弥生土器



PL.17 免田式土器とその他の弥生土器

石　　器

沖縄後期の時期には石器類、特に石斧の激減が今までの調査成果で確認されている。本遺跡もその例にもれず、約500㎡発掘したわりに僅か5点の出土である。他の石器類としてたたき石、すり石、石皿等が得られた。ここでは主要なものについて簡記する。なお、石質については未同定であるが、伊江島にはチャートと琉球石灰岩しか産しないことより、石器のほとんどは島外からの持ち込みである。

Fig.15の1は磨製の定角片刃石斧である。刃部は片面からの砥ぎだしが強く、鋭い切先を有する。一方向への刃こぼれがみられ、アッズとして使用されたものと考えられる。同図2は磨製の両刃石斧である。最終形態として扁刃になっているが、再三の砥ぎ直しによるものである。わりと扁平ではあるが、刃部の形状よりアックスとして使われたと思われる。同図3は六面使用のたたき石で、自然礫をそのまま利用している。両サイドは抉れるまで使われ、上・下両面の潰れも著しい。同図4は比較的大型の自然礫を用いている。3と同様に六面使用のたたき石で、両サイドは若干抉れている。表裏面の一部に使用剥離がみられる。両標品とも沖縄後期に普遍的にみられる石器で、潰れの状況より貝の割り処理や木の実などの粉砕に用いられたものと考えられる。　　（岸本義彦）

PL.18 石斧・たたき石

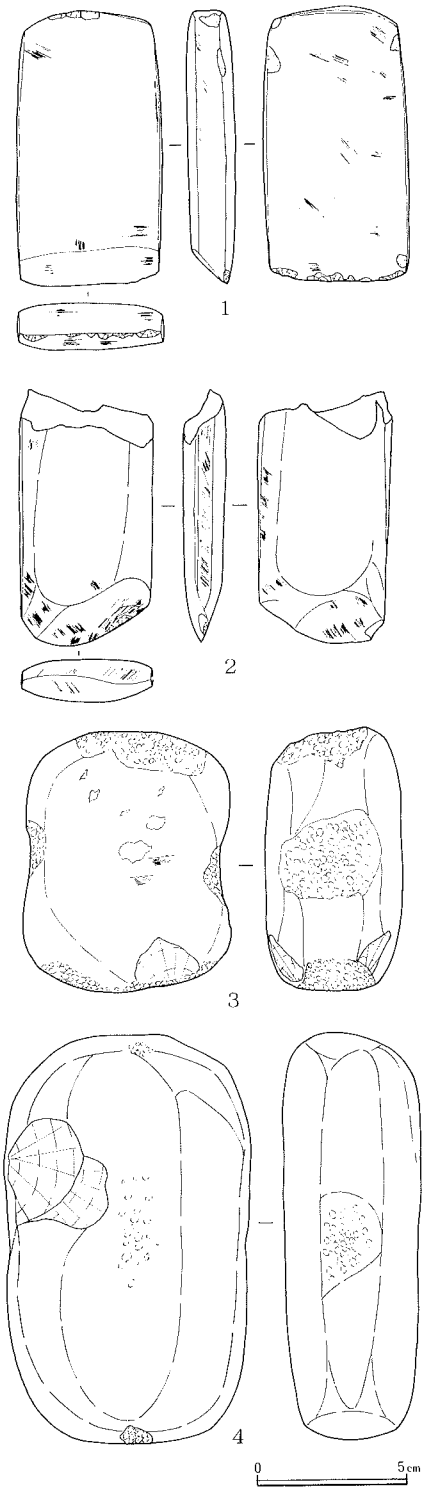


Fig.15 石斧(1、2)・たたき石(3、4)

骨　製　品

A．骨針

イノシシの腓骨を素材とした製品である。計9点の出土があり、うち完形品が5点で、頂部のみの破片が1点、尖部のみの破片が3点である。

素材の腓骨の遠位部を軸とし、その反対側をとがらせている。素材からくる制約上、扁平なつくりで、軸頭部は、骨端を欠失する。

この平たいバチ状になる軸頭部を加工し穿孔する形態（1、2）と、そのまま残す形態（3～5）とがある。

1は、軸の左右にわずかな隆帯を作り出している。　（盛本　勲）

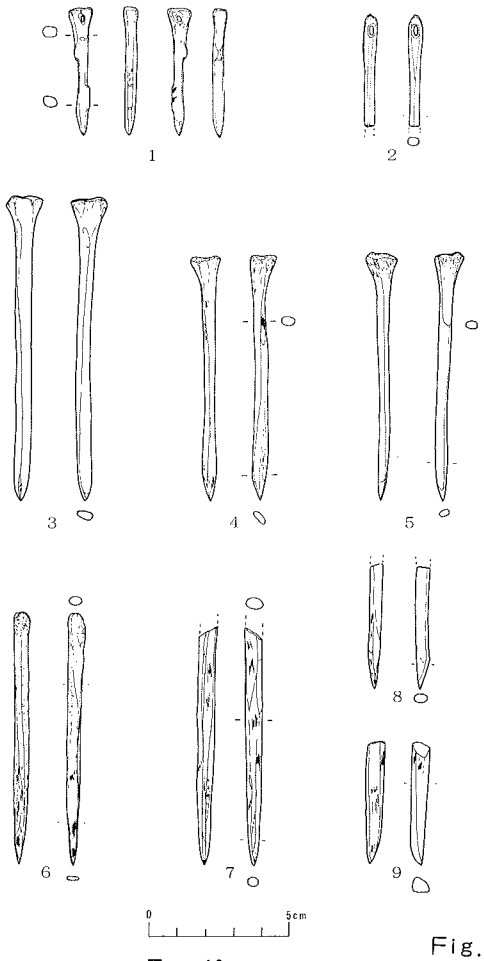
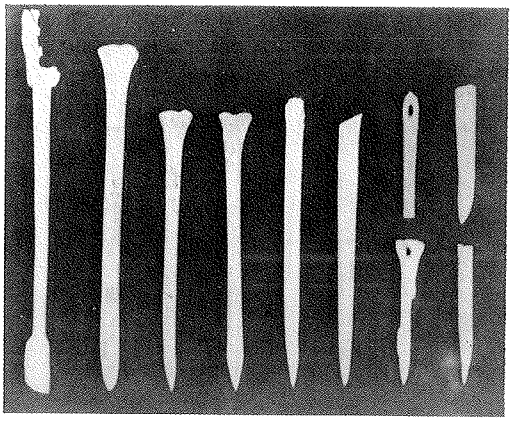


Fig.16　骨針



PL.19　骨針・かんざし様骨製品

B．かんざし様骨製品

イノシシ左腓骨を素材としたものである。頂部上端と左端を欠失する。

素材の遠位部を軸とし、その反対側をヘラ状に仕上げ、軸頭部には3つの孔が穿たれている。そして、穿孔された骨端部の表面の残存部は、凹凸に加工されている。

軸の断面は、頭部側で楕円形に、その反対側にいくに従って円形をなしていく。

M－5、V層の出土である。（盛本　勲）

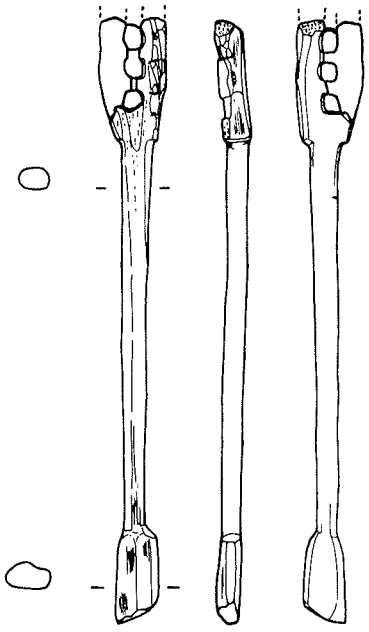


Fig.17 かんざし様骨製品　0　3cm

貝 製 品

A．貝札

Fig.18の1.2はイモガイ科（おそらくアンボンクロザメガイであろう）の螺頭部に接した最も幅の広い部分の体層を長方形に切りとり、その外面に彫文を施したものである。

1は、幅5㎜前後の帯文を上下端に横走させるとともに、その間にタスキ状の文様を浮き彫りにしている。

表面および周縁とも研磨によって丁寧に仕上げているが、裏面は皿状になっているため、素材そのままで光沢面を残し周縁部のみを研磨によって仕上げている。乳白色を呈す。

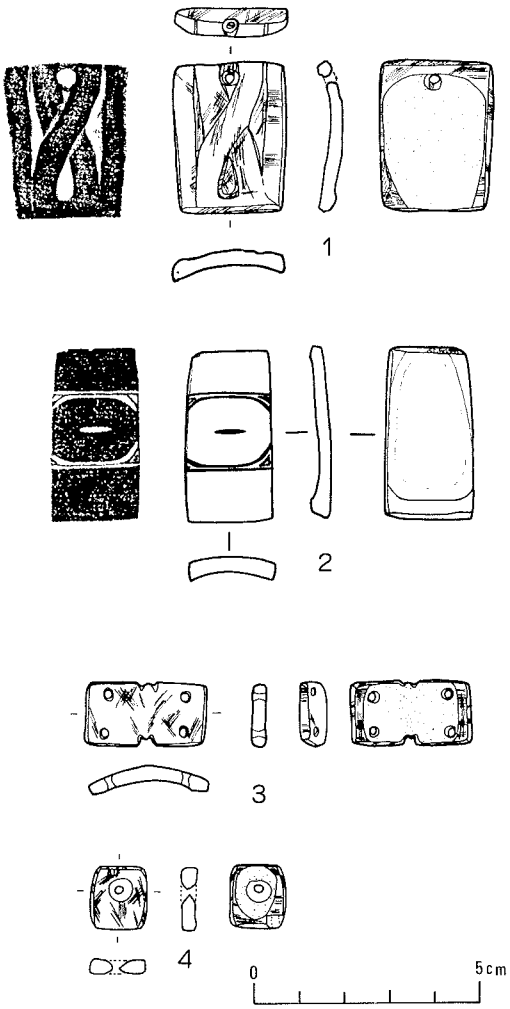


Fig.18 貝 札

K－11、Ⅳ層の出土である。

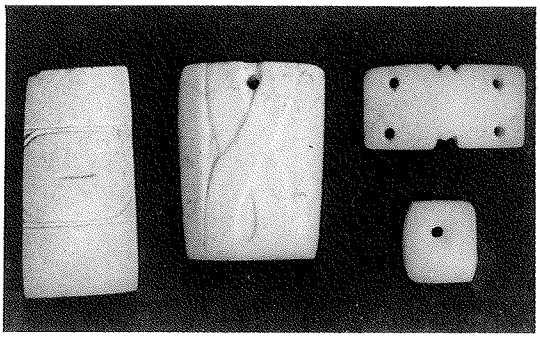
2は、細線によって上下を区画した後、その中の四隅に直角三角形を浮かし彫りにし、それに沿って隅丸方形状に線彫りがなされている。また、そのほぼ中央部分に0.8㎝長の凸レンズ状の横線を施している。広田上層タイプに属する。東区Ⅰトレンチ Ⅶ層の出土である。

3は、長方形の長辺の中央部にW字状に抉りを入れ、四隅に小孔を穿っている。貝種は、イモガイ科等の巻貝かと思われるが、判然としない。乳白色を呈す。F－10　Ⅱ層出土。

4は、1.4×1.2㎝、厚さ0.3㎝の扁平な方形をなす板状の製品の中央よりやや上方に孔を穿った製品である。孔は、穿孔後、斜位に緩やかな角度で拡張している。

全面とも光沢を有するほど入念な研磨によって仕上げられているため、素材については判然としない。L－10、Ⅶ層の出土である。

（盛本　勲）



PL.20 貝 札

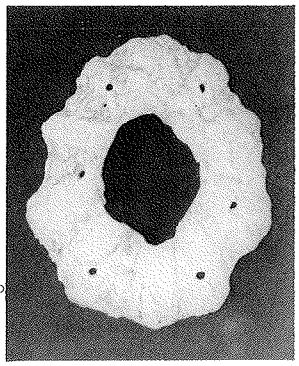
B．オオツタノハガイ多孔製品

オオツタノハガイの殻頂部に、径2.4×3.25㎝大の孔を穿ち、さらにこの孔を中心として左右ほぼ対称に6つの紐を通す径2㎜程の小さな孔を穿ったものである。

中央の孔は、打ち欠いたのみであるが、腹部の6つの小孔は、貝の表面の凸になった放射肋を研磨した後、内外面から細い錐状のも

ので丁寧に穿孔されている。また、肋間の凹になった部分は、研磨が行き届かず、自然面を残し、原色を保持している。E－3Ⅶ層の出土である。

（盛本　勲）



PL.21 オオツタノハガイ製多孔製品

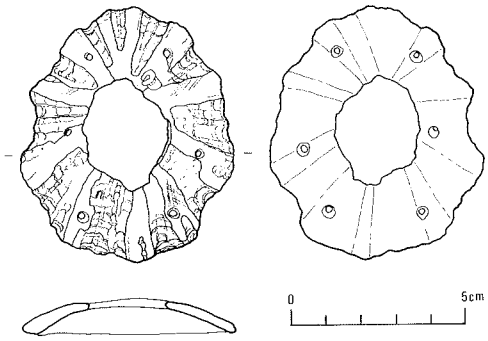


Fig.19　オオツタノハガイ製多孔製品

C．貝輪

素材として利用されている貝には、オオベッコウガサガイ、オオツタノハガイ、イモガイ科（アンボンクロザメガイ）、ゴホウラ、テングガイ？がある。

以下、素材別に略述する。

1．オオベッコウガサガイ製

素材の殻頂部を打ち欠き、孔周線に研磨を施し仕上げている。内外面は、素材のままの状態で特に加工の痕跡は認められず、内面には貝独特の真珠光沢が、外面には放射肋を残している。

孔の内径は、4.9×4.0cm、高さ0.9cmである。L・M－10、Ⅷ層の出土である。

2．オオツタノハガイ製

3点の出土がある。いずれも殻頂部を打割後、内孔面を卵形に研磨を施して仕上げている。

加工は、内面は素材のままの状態を残すが、外面の孔周辺は比較的丁寧に研磨仕上げがなされているものの、縁辺部に行くにしたがって素材特有の放射状の肋を残し、研磨された部分と、残された部分が縞状の文様をなす。

孔内径は、2が4.8×3.7cm、3が7.05×5.2cm 4が8.0×5.7cmである。

各々の出土区、層位は下記のとおりである。

2．M－12、Ⅱ層
3．D－6　Ⅸ層
4．D－6　Ⅸ層

3．ゴホウラ製

ゴホウラガイによって製作された貝輪は、完成品3点と、他に製作途中の未製品が相当量出土している。

未製品（Fig・20の9）

背面部を取り入れた1点を図示したが、標品のように背面および殻軸、外唇、腹面の一次加工としての打割工程を完了させ得ているものは少なく、そのほとんどが中途段階における失敗作と思えるものが多数を占めるようである。

完成品（Fig・20の5・7・8）

3点ともその利用部位、形態が異なる。

5は、背面部を取り入れたもので、入念な研磨によって仕上げられている。

欠損品であるため、全体の形状については不明であるが、残存部より推すと内孔面は若干角ばった感じの円形になると思われる。

幅は、全体的にやや細めであるが一定しており、1.2cm前後である。

7、8は、腹面部を利用したものである。

7は、打割によって成形したあと、丸い腹部を研磨工程によって仕上げるが、次体層まではゆきとどかず素材面を残す。

螺頭部および前溝付近は、緩やかな丸みを持ちながらも全体的に角ばった感じで仕上げ

ている。

8は、殻軸を含めた面から螺腹部あたりを利用したものと思われるものである。入念な研磨加工によってかなりすり込んでおり、厚さは8㎜前後と極めて薄く仕上げている。

全体の形状は、角ばっている。

テングガイ製（Fig・20の10）

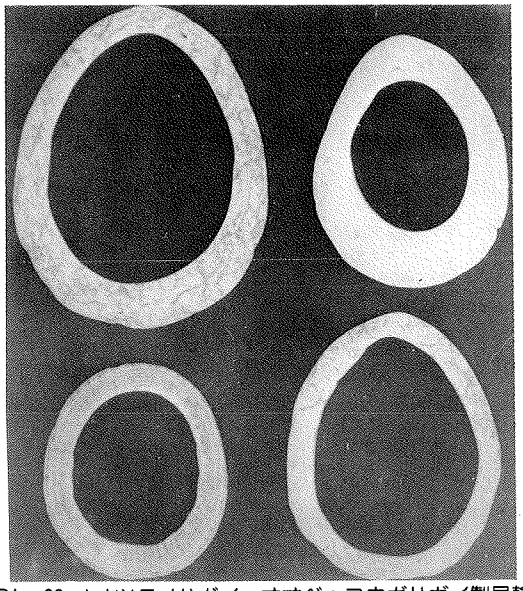
巻貝の殻口部を利用したものである。殻口部の厚さ、形状等の諸特徴よりテングガイと思われる。打ち欠いて素材を取得した後、研磨によって仕上げるが徹底しておらず、上下の水管溝付近は素材面を残す。

全体的に重厚で質感がある。孔内径は7.55×5.3㎝である。D－7　Ⅲ層の出土である。

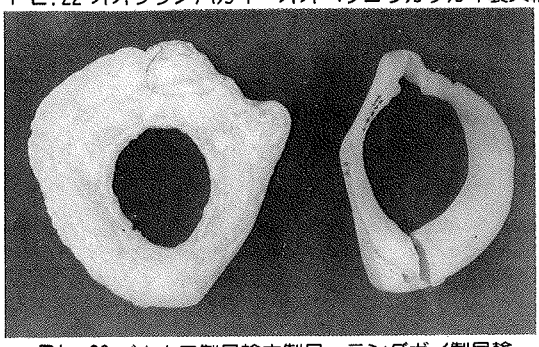
イモガイ製（Fig・20の6）

複合使用の貝輪である。アンボンクロザメガイの螺頭部に接する最も径の大きい部分を輪切りにし、さらにそれを約 $\frac{1}{3}$ に裂き両側縁の中央部付近に小孔（径3㎜）を穿ったものである。孔は、内側から穿たれ、左側に1個右側にはそれと対峙する位置に1個、その下に更に径1.5㎜の小孔がある。

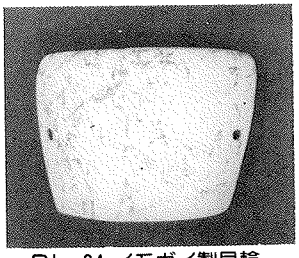
加工は、周縁および外面は研磨によって仕上げるが、外面は十分にいきとどかず螺頭部に最も接する部分には、アンボンクロザメガイ特有の斑点文様を残す。　（盛本　勲）



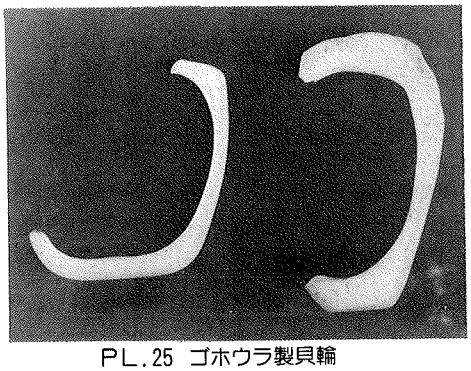
PL.22 オオツタノハガイ・オオベッコウガサガイ製貝輪



PL.23 ゴホウラ製貝輪未製品・テングガイ製貝輪



PL.24 イモガイ製貝輪



PL.25 ゴホウラ製貝輪

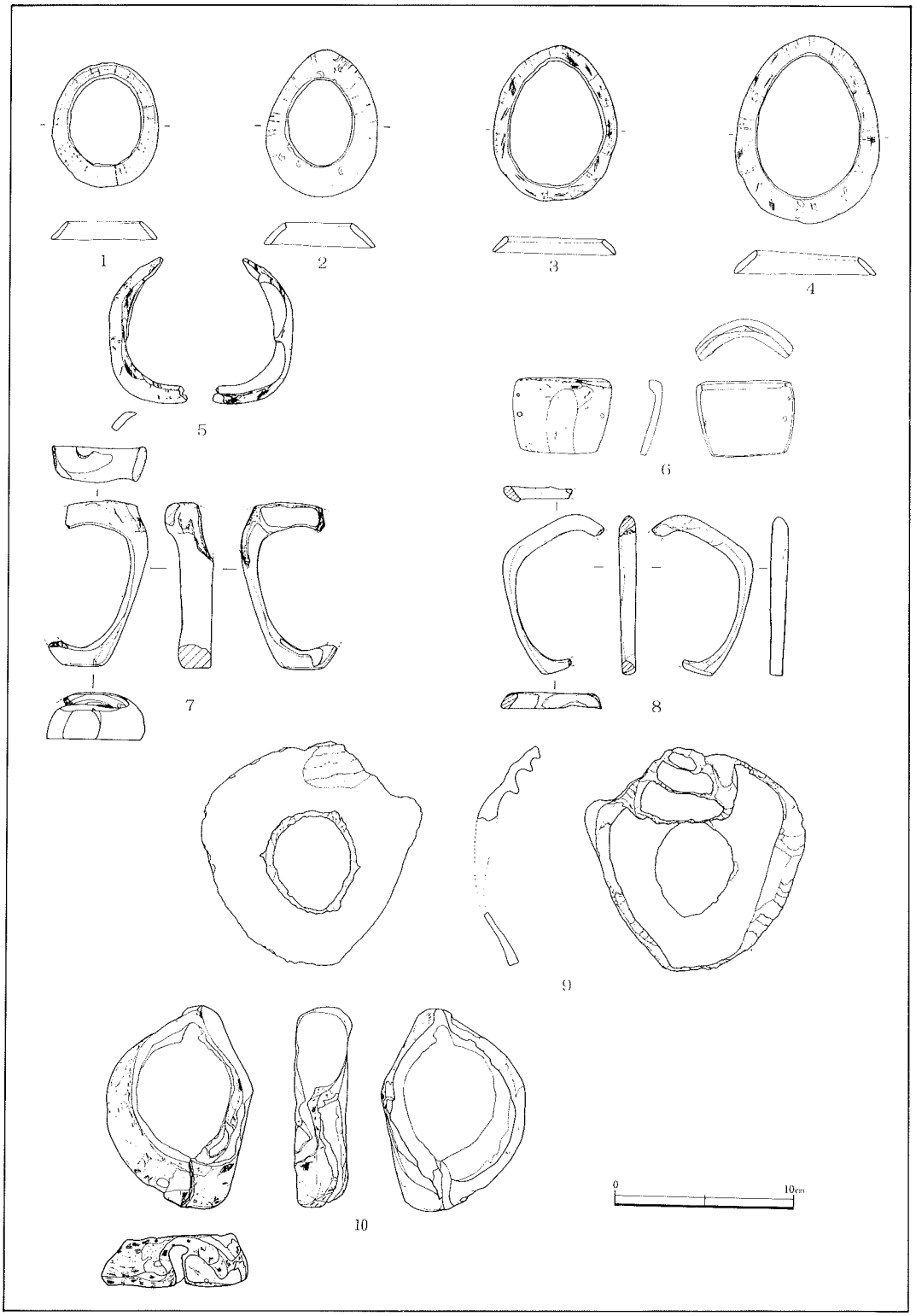


Fig.20 貝輪

D．ヤコウガイ製匙

ヤコウガイを素材として、その素材の保有する自然曲面を螺旋方向に沿って切りとり、スプーン状に加工した製品で計４点の出土がある。

内１点は幼貝で（Ｆｉｇ･21の１）、他の３点（同図２～４）は成貝を使用している。

３～４は、完形品であるが、１～２は柄部を欠失し、身部のみの欠損品である。

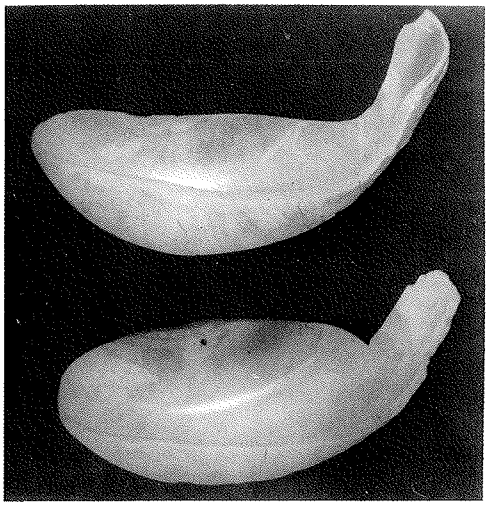
これらの製品は、素材から切り取った後、柄部を作り出し全体形を形づくる。その後研磨加工を行なうが、この場合周縁全体に研磨を施す工程と、素材の外面に有する肩部の肋（螺旋状の稜）に研磨を施す工程がある。

前者の工程は標品４点の全てに行なわれているが、後者の工程は、３は極めて入念に行なわれているものの、他の３点はこれに比すると比較的簡単に仕上げられている。

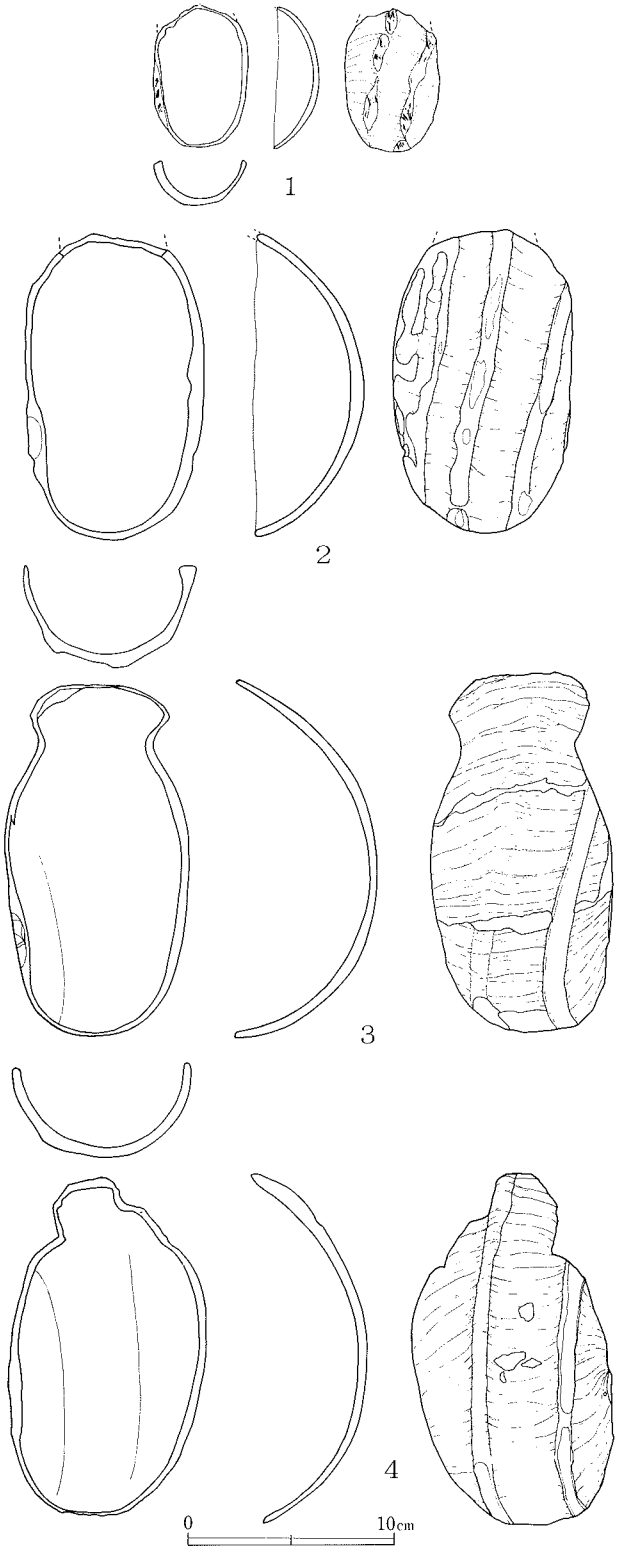
各々の出土区・層位は次のとおりである。

１．Ｄ－３　II層
２．表採品
３．Ｊ－10　VI層
４．Ｌ－９　Ｖ層

（盛本　勲）



ＰＬ.26　ヤコウガイ製匙



Ｆｉｇ.21　ヤコウガイ製匙

石　製　品

Ｆｉｇ･22の1は、粘板岩製(？)の製品で、平面形はドングリ形を呈し、扁平である。ほぼ中央部分の両端に抉りを入れた製品である。

表裏面および周縁とも研磨によって仕上げているが、周縁部に比して表裏面は必ずしも丁寧とは言えず自然面を残すところが多い。

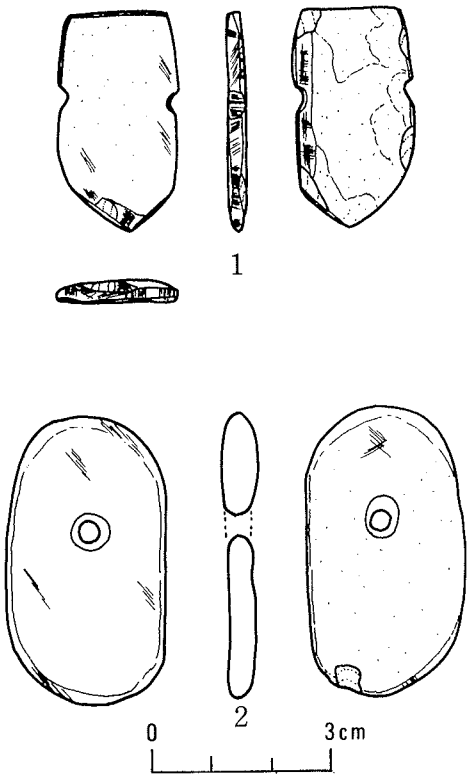
Ｄ－９グリッドⅡ層の出土である。

2.0×3.6cm

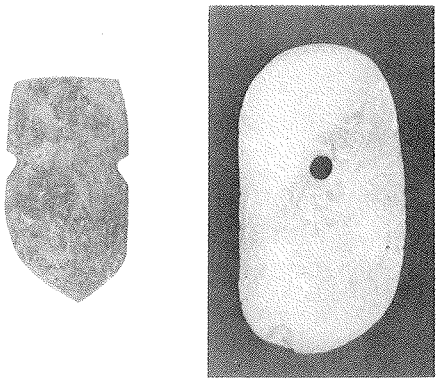
同図２は、小判形の扁平な自然石のほぼ中央より上方に径3.5mmの孔を穿った製品である。表採資料である。

2.55×4.7cm

（盛本　勲）



Ｆｉｇ.22　石製品



ＰＬ.27　石 製 品

土　製　品

土製匙（Ｆｉｇ･23）

２点の出土がある。

両者とも手づくねで作られており、指頭痕が明瞭である。

１は、柄部を欠失するが、上面観は隅丸方形状を呈し、底は鍋底状をなす。

標品は、身と柄部が別々に作られており、身を作製した後、その長軸の内側に柄を貼り付けて製作したことが窺われる。

長さ5.8cm、最大幅5.4cm、最深2.5cmを測る。

Ｋ－４、Ｖ層の出土である。

２は、底、周縁の一部を欠失するが、身・柄ともよく残し、その全体形が把握できる。

上面観は、長楕円形を呈し、底は舟底状をなす。製作は、１とは異なり、身、柄部とも一挙に仕上げている。

本標品は、柄部の形態に若干の相異は見られるものの、その全体形は貝製品の項で述べたヤコウガイ製匙と酷似しており、それを模したものであろうことが推察される。

同様な製品は、柄部とその近くのみの欠損品ではあるが、本貝塚に近接するナガラ原西貝塚においても１点出土している。

長さ15.2cm、最大幅7.2cm、最深4.1cmを測る。

Ｎ－11、Ｖ層の出土である。

（盛本　勲）

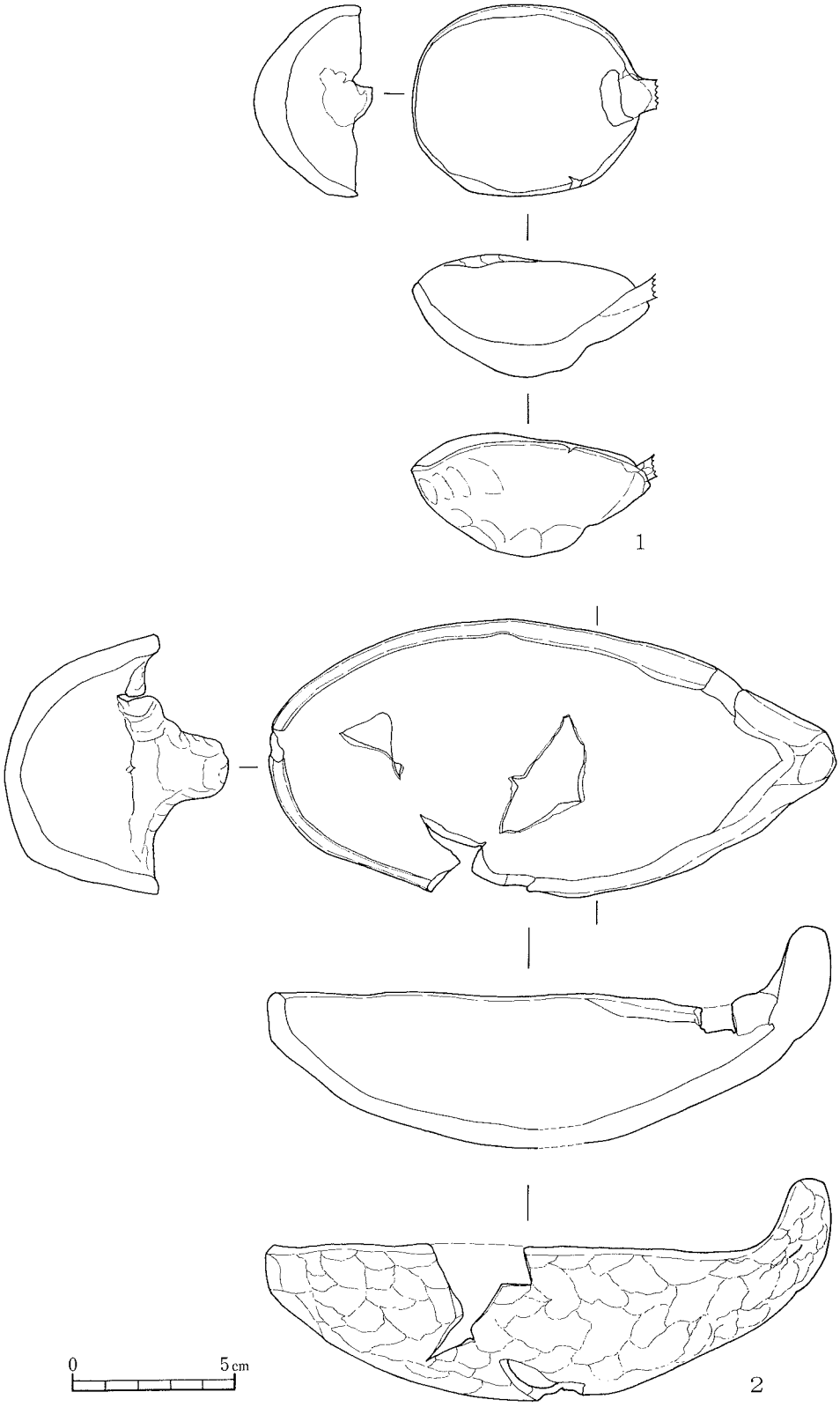
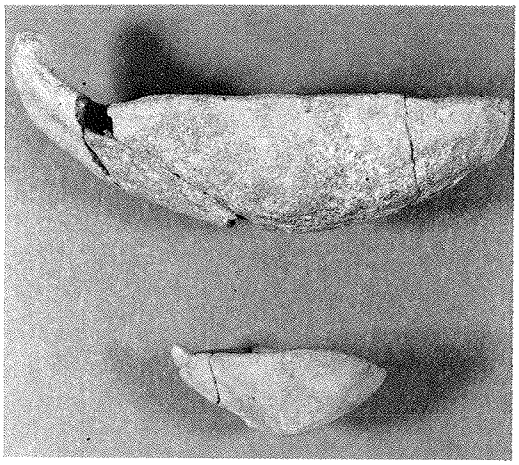
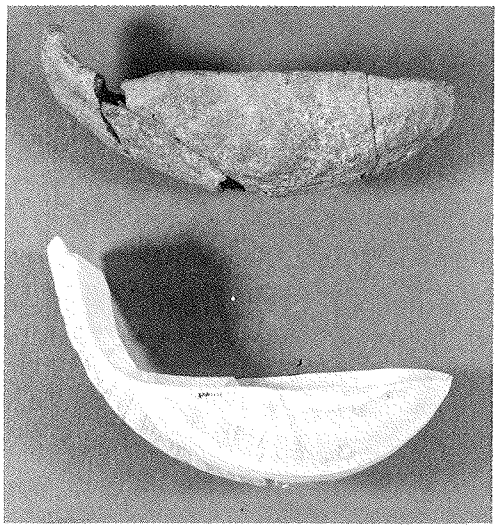


Fig.23　土製匙



PL.28　土製匙



PL.29 上・土製匙　下・ヤコウガイ製匙

ガラス小玉

5×6㎜の楕円形を呈する小玉で、中央に径2㎜の紐を通す孔が穿たれている。

両端は、砥磨によって仕上げられており、平坦面をなす。

色調は、不透明な青色を呈す。

D－7、Ⅸ層の出土である。

（盛本　勲）

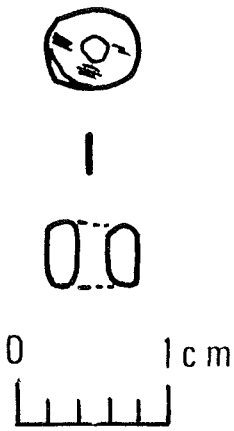


Fig.24 ガラス小玉

自然遺物

A．貝類

膨大な出土量があるが、まだ未整理の段階にあり、種ごとの数量関係、およびその構成比については不明である。

しかし、発掘調査時および採取されたものについて概観した限り、PL．30に見られるように、その主体をなすのは、サラサバテイ、ニシキウズガイ、ムラサキウズガイ、ヤコウガイ、チョウセンサザエ等の岩礁性巻貝の類と、ヒメジャコ、ヒレジャコ、シャゴウ等の潮間帯下珊瑚礁および岩礫・岩礁に棲息する大型貝の類である。

この中でも特に目だつのは、シャコガイ科の上記3種と、サラサバテイである。

これらは、貝塚前面に広がる珊瑚礁で採捕されたようで、当時の副食物としてかなりのウェイトを占めていたようである。

B．獣、魚骨類

獣、魚骨類もまだ未整理の段階であり、各各種の部位ごとの数量関係、あるいはそれから推定される最少個体数、その構成比等は不明である。

発掘時にグリッド別および層位別、レベル別に採取されたものについて概観する限り、獣類では陸獣のイノシシ、海棲哺乳類のジュゴン、は虫類のカメ類等が主体をなすようである。

魚類では、珊瑚礁域に棲息するブダイ類、ベラ類、タイ類などが目だつ。

この他に、ウニ類（おそらくバフンウニであろう）、カニ類の鉗脚（鋏部）等も出土している。

（盛本　勲）

PL.30 貝類の出土状況

まとめ

具志原貝塚は沖縄の原始時代遺跡として最も典型的な例のひとつであると共に、多くの要素を備えた豊かな内容をもつという点で特異であるといえる。すなわち、個々の要素は沖縄原始時代のいろいろな時期の内容や特色をよく表わしており、それが一箇所で重なり合って集約されているのである。

本文の各項で紹介してきたことではあるがあらためて要約すると次のとおりである。

1．海岸低地（砂丘）に立地すること。

島の南側の広い緩斜面を後背地にひかえ、前面の珊瑚礁に囲まれた遠浅のラグーン（礁瑚）を主な生業の場として生活していたことが理解される。ラグーンをその集団の生業領域として重視することは、特に弥生時代相当期（沖縄後期の前半頃）によくみられる。

具志原貝塚から出土するおびただしい量の大形貝や魚骨は、漁撈技術や労働力編成の一定の向上に支えられた活発な漁撈経済の展開を示している。しかし一方ではイノシシ骨の出土も比較的多く、山野における狩猟活動も伝統的に続けられていたようである。ただし、原始時代に伊江島にイノシシが自然生息していたか、それとも他の島から得たのかは未解決の課題である。

2．複数の時期の文化層が重複していること。

これまで伊江島においては縄文後期（沖縄前期）の遺跡が最も古いとされてきた。遺跡の数はかなり多い方に属するのであるが、その殆んどは個別に形成されている。具志原貝塚では、これが縄文前期にさかのぼる層が最下層に位置し、縄文後期さらには弥生時代相当期にまで続くという、時期区分上の明快な層の重なりを提示することとなったのである。

それはまた、伊江島における新石器時代の上限を、さらに古く遡らしめたという意義をも有しているのである。

3．移入弥生土器の出土が語る南北の交渉

1963年の具志原貝塚における弥生土器（須玖式＝山ノ口式）の発見は、沖縄考古学研究史上画期的な「事件」であった。そして今また、これまで宇堅貝塚でわずかに細片1片の発見例であった弥生土器のひとつ「免田式土器」が、具志原貝塚で新たに数片得られ、九州との交渉がいっそう確実なものとなったのである。それは弥生土器のほかに、逆に九州へ移出されたゴホウラ貝製腕輪や半製品などの類例が数多く出土していることからも明らかである。

この南北交渉の確認は、それ自体がまた新たな課題をもたらすこととなった。個別直接的には、九州人あるいは南島人の相手方への直接の渡航か、それとも島々と人々の手を経て「伝えられた」ものなのか。さらには南島から九州へ運ばれていったゴホウラ貝は、彼地で腕輪となっているのであるが、南島へもち込まれた弥生土器はいかなる意味をもつのであろうか。土器それ自体と、容器の中身のいずれが目的物であったのか考察を進めるべき問題である。

もうひとつ九州弥生人との（直接又は間接の）交渉は、社会の総体としては南島がどのような影響を受けたのであろうか。とりわけ弥生時代の基本的な要素である稲作と金属器の伝来および普及の有無は、その後の社会と文化の展開に重大な影響を与えるとみられるだけに、弥生土器の発見が九州との何らかのつながりを示しているという事実は、いささかも軽視できないのである。

さらにまた、特に須玖式＝山ノ口式系および免田式系に限られているという南島の事実は、逆に見れば九州弥生土器文化の、あるいはその担い手たる集団の当時の九州における状況を反映していないだろうか。外域へ展開し交渉圏を拡大していくという傾向が強いように思われるのである。

3．弥生時代相当期（沖縄後期）の生活の多様化を示す種々の遺物の出土

土器の中にかなり小型のものがあり、また夜光貝匙を模したものもある。貝製品は特に

種類が多く、自然の素材の特質をよく生かした匙、腕輪、垂飾などがある。その他に骨器などもある。これらのいくつかに伝統的なものが含まれるものの、量の増加ともあわせてある程度の生活の多様化、活性化が感じられる。また、これらの資料は当時の人々の日々の暮らしと社会の様子を推し測る上でも有効である。

4．沖縄後期土器の底部形態――尖底から平底へ――の変化をめぐって

沖縄後期土器を底部形態のみで大きく分けると尖底と平底（特にくびれ平底）の2種あり、多くの遺跡で両者が混在して得られている。

その前後関係については、沖縄後期後半にはくびれ平底だけになるという事実まではおさえられてきたが、いずれが初出かという事はなお不明であった。しかし近年の伊是名村具志川島遺跡西地点、伊江島ナガラ原西貝塚、同島阿良貝塚などで尖底器形が殆んどを占める例が知られるようになった。今回の具志原貝塚西区も尖底で占められている。

これらのことから、沖縄後期土器は尖底が初期の器形であること、阿良貝塚や具志原貝塚の例からその時期は弥生時代中後期頃（絶対年代上のズレの可能性は考慮を要する）にあたることなどが明らかになってきたといえる。

5．生活地域と墓域

具志原貝塚一帯は食料資源の海への依存度の高さもあって、縄文時代前期以来の集団に生活の適地として利用されてきた。縄文期にはなだらかな赤土平坦地がそのまま海岸へと至る低地に居住したが、弥生相当期には砂丘がかなり発達して海岸で高い砂丘堤が形成され、その内側の斜面に居住をしたもののようである。

弥生相当期には大形貝を大量に採取し、居住地において食料に供すると共に、その殻を容器や装身具の重要な素材とした。遺跡空間における貝殻の密集地点、アンボンクロザメ貝の集積地点の存在は空間の使い分けを表わしている。特にアンボンクロザメは貝札などの素材として、まとめて管理されているのであるが、規則性をもった集積のもつ意味は物理的安定性のみにとどまるのか、それ以上の思想や観念に支えられた意図的配列なのかは検討を要する。

一方、砂丘の頂部は墓域空間であった。数体の人骨が貝製副葬品や特殊な器形の土器と共に検出されたのであるが、集落に隣接した別の世界の空間を併置するという構成を有することが判明したのは意義深い。

具志原貝塚の縄文期から弥生相当期に至るうつりかわりを見ると、この伊江島南岸が原始時代において、かなりの好適な生活地であったことがわかる。一方では、伊江島の位置が占める重要な特質にも思い至るのである。

南北の文化交渉史の中で、おそらく伊江島は殆んどの場合に何らかの関わりをもつ機会に恵まれることが多かったであろう。その集団のもつ主体的条件のほかに、このような環境がもたらすさまざまな可能性や制約というものも軽視できないことを示しているように思われる。

（安里嗣淳）

沖縄県文化財調査報告書第61集

伊江島　具志原貝塚の概要

昭和60年2月7日

編　集　沖縄県教育庁文化課

発　行　沖縄県教育委員会
那覇市旭町1番地
TEL. 0988(66)2731

印　刷　株式会社丸正印刷
那覇市国場349－3
TEL. 0988(54)8484